『聖魔王国の予言』

巽 ヒロヲ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

プロローグ

かの聖王女と結ばれし者　聖魔両王国の真の主君とならん
運命の剣にて双つに分かたれしものは　一つとなり
滅び去る　古きものの声が
まったきものによる　永き治世のはじまりを告げるであろう

アルメキア聖王国王女　ノエル・リルテニア　生誕の際の予言

　アルメキア聖王国に隣接する荒野に、突如、ネルドール魔王国が勃興し、建国宣言を行ったのは、四年前のことである。
　時に、アルメキア聖王国の双子の王子と王女――レオンとノエルの、十二歳の誕生祝賀祭の最中のことであった。
　歴史的に見れば、ネルドール魔王国のそれは「建国」と言うより、「復活」と言った方がいい。ネルドールは、アルメキアとほぼ同時期に成立した、由緒ある国家なのだ。しかし、百年近くもの昔、ネルドールはアルメキアの討伐軍によって壊滅し、その「魔」の名を冠する王家は滅亡したはずであった。
　しかし、いずこからともなく現れた「魔王」ヴァルド・ネロは、ネルドールの廃墟に巣食う盗賊や異種族達を、その魔力と指導力によって手中に収め、わずか一年でネルドール魔王国の再建国を果たしたのである。
　聖なる神々の代理人たる聖王家によって統治されるアルメキア聖王国と、魔道を以って国土を支配するネルドール魔王国の間に、強い緊張関係が生じたのは、言うまでもないことであった。
　周辺の小王国群は、日和見を決め込んだ。アルメキアとネルドール、いずれも劣らぬ大国であることは、誰の目にも明らかである。遠からず、この二つの王国は雌雄を決し、勝者がここ一帯の支配者となるだろう。

　先年、この二つの勢力の拮抗が崩れかけた。魔王ヴァルド・ネロによって異界より召還された巨大な竜が、アルメキアの国土を襲ったのである。
　この悪竜の恐怖にアルメキア国民はよく耐え、兵士達は勇敢に戦った。その戦いの中で、自ら陣頭指揮をとったアルメキア聖王ナンテスⅠ世は、片脚を失うほどの重傷を負った。だが、一年にもわたる苦闘の末、遂に悪竜は一人の英雄によって屠られたのである。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして、再び、両国の間に、偽りの平穏が訪れたのであった。

しかし……

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第一章

「あーア、退屈……」
　ノエルは、アルメキア聖王国の王女にして第二位王位継承者とは思えぬような仕草で、邸宅のテラスで、うン、と伸びをした。
　アルメキア聖王国の王都アルムの中心部にある、騎士団長の邸宅である。すぐ近くに聖王宮が、その偉容を誇っている。
　今日のノエルの衣装は、彼女自身の純潔を示すかのような、処女雪のような純白のドレスである。そのドレスを飾るたっぷりとしたフリルやレースは、まるで美の女神を包む海の泡のように、彼女のほっそりとした体を優しく包んでいる。
　ノエルは、その豪奢な金髪を、今日に限っては慎ましやかにまとめて、アップにして髪止めで止めている。黄金のように輝き、波打つ金髪は、彼女の密かな自慢であったが、今日のパーティーの主役はノエルではないのだ。
　髪をまとめているために露になった彼女のうなじは、ため息が出るほどに美しいラインを描いていた。その白い首筋を、淡い月光が照らす。
「ここにいらっしゃいましたか、殿下」
　後から声をかけられ、ぴくっと小さく方を動かし、ノエルは振りかえった。エメラルドグリーンの大きな瞳を見開いたその顔は、いつもの澄ました表情より、格段に幼く見える。
　その瞳が、美丈夫、という言葉が一番ぴったりくるような、若い男の姿を映した。獅子のたてがみのような褐色の髪に縁取られたその顔は、精悍にひきしまりながらも、ごくわずかに少年の面影を残している。
「い、いやですわ、ダニル将軍……」
　果実酒によってほんのりと染まっていたノエルの頬が、さらに赤く染まる。
　ダニル将軍、と呼ばれたその若い男は、そのノエルの顔に、しばし言葉を失った。
（美しい……）
　声に出そうになるのを、あわてて抑える。
　完璧な輪郭を描いた小さな頭に、柔らかそうなサンゴ色の唇。あくまで白く滑らかな肌。秀でた額。そして、形のいい鼻梁に、やや大きめの、深い緑色の瞳……。
　老臣達が、「死んだ王妃殿下に生き写し」と称する美貌である。しかし彼には、肖像画でしか見たことのない王妃よりも、目の前の温かなノエルの方が、何倍も魅力的に見えた。
「どういたしましたの？　将軍……。主役がこんなとこにいらしては、せっかくの席が台無しですわ」
「い、いや……」
　照れ笑いを浮かべながら言うノエルに、ダニルは他愛もなくうろたえてしまう。
　今日のパーティーは、騎士団長主催による、悪竜討伐の記念パーティーである。同じよ

Yeom PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

うな名目で、ここ一ヶ月、すでに何度も宴が催されているのだが、人々としては何回でも祝いたい気分なのだろう。
「いささか、酔いましたもので、少し夜風に当たろうかと思いまして……」
「それは残念」
　くす、とノエルは微笑んだ。
「てっきり、私を探しに来てくださったものかと思ってましたのに」
　この、十以上も年下の少女の冗談に、ダニルは顔を赤く染めてしまった。
「いや、その……じ、自分は……実は、姫を、さがしておりました」
「え？」
　ひどく重大なことを告白するかのような彼の口調に、ノエルはきょとんとした表情を浮かべる。
「自分は……その……何と身のほどをわきまえぬ奴とお思いでしょうが……その、殿下のことを、お慕いして……」
　いつになく、しどろもどろになるダニルの逞しい体に、ノエルはその華奢な体をそっと寄せた。
「それ以上はおっしゃらないで……ダニルさま……」
　手を伸ばせば触れることのできるほど近くにあるノエルの、意外なほど真剣な顔つきに、ダニルは思わず息を飲んだ。
「ドラゴンスレイヤーの称号をお受けになったあなたが、このような所で、要らぬ恥をおかきになることはありませんわ」
「は……？」
「ご覧になったでしょう？　私、本性はとてもおてんばで、はしたない娘ですのよ。それでも、よろしくて？」
「じ、自分こそ……一介の武人でしか……」
　また何か言おうとするダニルの前に、王女は、シルクの長手袋に包まれた、細く長い人差し指を優雅に立てた。
「あなたは、救国の英雄です」
　ノエルは、にっこりと春の日差しのような笑みを浮かべた。
「お父様も、私たちのことを、きっと認めて下さいますわ」
「姫……」
　ダニルの大きな両手が、ノエルの白く小さな肩に置かれた。
　そして、今生まれたばかりの恋人達が、その証を求めるように、唇を寄せる。
「ノエル王女殿下」
　その二人の動きを、硬く、冷たい声が遮った。
「……なんですの？」
　辛うじて王女の威厳を保ちながら、ノエルは、テラスに現れた不躾な闖入者を睨みつけ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

る。
「王子殿下のお加減が優れませぬゆえ、急ぎ、ご帰宮のご用意をお願いいたします」
　その声の主は、王女の視線になど一向にひるんだ様子もなく、淡々と続けた。濃い青色のゆったりとしたローブを痩せた体にまとい、周囲の貴人に顔を見せるのをはばかるように、深々とフードをかぶっている。一見して魔道士と分かるいでたちである。
「分かりました。馬車の用意をなさい」
「御意」
　魔道士は、慇懃に頭を下げ、そしてダニルに顔を向けた。
「邪魔をしたな、ダニル」
「気にするな、ハリウス」
　内心はどうあれ、ダニルは見事な笑みで魔道士の言葉に答えた。

「ごめんなさい、ねえさま……せっかく、楽しみになさってたのに……」
　王室専用の馬車の中で、くったりとクッションにみをもたれさせながら、レオンはすまなそうに言った。
「いいのよ、レオン。あなたが気にすることじゃないわ。それに、騎士長さんたちのお話は、退屈なものばかりだったんですもの」
　ノエルは、そんな病弱な弟に、優しく微笑みかけた。
　弟とはいえ、ノエルとレオンは双子の姉弟である。ただ、レオンは生まれつき体質が虚弱であり、十六になった今でも、同い年の少女である姉とほぼ同じ身長である。まるで、時の神に忘れられてしまったかのようだ。
　結果、レオンは、姉のノエルそっくりの外見を保ったまま、今に至っている。肩で切りそろえられた髪と紫色の瞳という違いがなければ、父王でさえ、その顔を見分けることは難しいかもしれない。
「でも、なにかいいコト、あったみたいですね」
　人込みの中で疲れたのか、やや蒼白になった顔に、それでも笑みを浮かべながら、レオンが訊く。
「んふ……ダニルがね、あたしのコト、好きだって言ってくれたの」
　ノエルは、同じ年頃の娘と変わらない、無邪気な表情で、そう言った。レオンの前では、彼女は、聖王女としての仮面を被らずにすむ。
「ダニル将軍が？」
「ええ……。悪竜討伐に、西の山にまで彼が遠征に行ったときに、あたしが言えなかった言葉を、彼自身が言ってくれたのよ」
「それで……ねえさまは、将軍のもとへ？」

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「そ、それは、まだ分からないけど」
　ノエルの頬が、薔薇色に染まる。
「でも、彼はあたしの肩を抱いて……優しく口付けしてくれたわ」
「ウソ」
　くすっ、とレオンは少女のような笑みを浮かべた。
「ねえさま、ウソついてるでしょう」
「ふふっ……。レオンにはかくしごと、できないね」
　同じ星辰のもとに生まれたレオンとノエルの間には、常人にはない、不思議な感応力がある。愛しい人と初めてキスをしたというほどの衝撃を、この双子の弟が感じないわけがない。
「ホントはね、ハリウスの奴にジャマされちゃったの」
「……無愛想なんで、ねえさまのような方には誤解されるかもしれませんけど、彼は、忠実な臣下ですよ」
　レオンが、かばうように言う。かの宮廷魔道士は、レオンの養育係の一人でもあるのだ。
「それは、そうかもしれないけど……でも、魔道士でしょう？」
　ノエルに限らず、アルメキアの国民全体の、魔道士に対する偏見は根強い。その偏見は、ネルドール魔王国の復活以来、より強くなっているようだ。
「魔道を制するには、魔道を知らなくてはならないんですよ」
「お父様みたいなこと、言わないでェ」
　幼いころから素養を認められたレオンと異なり、ノエルは魔道についてまったく教育を受けていない。
「それに……ハリウスは、いい奴ですよ。思慮深くて、理性的で……僕は、魔道以外にも、彼に学ぶところが、たくさんあります」
「ふうン」
　ノエルは、なんとなく気のない返事をした。
「……ねえさま」
　改まった口調で、レオンが呼びかける。
「なあに？　レオン」
「幸せに、なれそうですか？」
「えっ？　……そ、そうね。ダニルなら、あたしのこと、幸せにしてくれると思うわ」
　はにかみながらそう答える姉に、弟はどことなく寂しそうな笑みを返した。

「ン……」
　大きなベッドの中で、シルクのネグリジェをまとったノエルは、かすかに身じろぎした。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

王女宮。聖王宮の中の、ノエルのための一角である。薄い桃色を基調とした大理石造の建物で、上品さを保ちつつも、カーテンや敷物にどこか可愛らしさをのぞかせている。
その、寝室の中に、聖王女として国民に慕われている少女の、秘めやかな声が、かすかに響いていた。
「ん……んン……ん……」
妖精の翅のように薄い、淡いピンク色のネグリジェの上から、ノエルは、そっと自らの乳首を撫でていた。
お椀を伏せたような、まだ発育途上ながら形のいい乳房の頂点にある、慎ましやかな桜色の突起が、次第に固く尖っていく。
「あァ……ダニル……」
王女は、愛しい名前をつぶやきながら、ネグリジェの前を開け、胸元にその右の手を差し込んだ。
壊れ物を扱うように優しい手つきで、自らの左の乳房をゆるく揉みたてる。
「んうッ……ン……あぅぅ……んはァ……」
その弓形の眉がたわめられ、ピンク色のつややかな唇から、白い歯がのぞく。
「ああ……い、いけない……いけないわ、ダニル……」
ノエルは、自慰行為の罪悪感を、空想の中の恋人に転嫁しながら、次第に大胆に手を動かしていった。
当時、片想いだった相手が、竜を倒すための絶望的な遠征に出かけたあの時。ノエルは、自らのうちに生じた不安や切なさに突き動かされるように、自らの体を慰めることを覚えてしまったのだった。
ダニルが、悪竜を退治し、無事に帰還した今も、彼女は、その悪習から逃れることができないでいる。
「んン……ッ！」
完全にネグリジェの前をはだけたノエルは、じんじんと甘くうずく両足の間に、右の手を差し込んだ。代わって、左の手が、すでに痛いほどに立っている乳首を撫であげ、二つの胸のふくらみを交互に揉む。
まだ薄い恥毛は、細く、金色であるために、ほとんど生えているようには見えない。そんな恥丘に手を這わせながら、ノエルは、そっと自分のスリットに指先を触れさせた。
「ダ、ダメ……っ！」
ぴくン、とノエルの体が、ふかふかのマットレスの上で跳ねる。
その部分は、すでにとろとろと愛液をあふれさせ、愛撫を待ちわびてひくひくと息づいていた。
「だめ……だめよ、ダニル……おねがい、やめて……」
拒絶の言葉を漏らしながらも、空想の中の恋人の激しさに合わせるように、ノエルははしたなく両手をうごめかす。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　指が、限りなく柔らかい陰唇の間に入り込み、くちゅくちゅと音を立てながら、上下する。
「んあァ、だ、だめ……はァッ……んくっ……イヤ、ぁあン……」
　はぁはぁと荒い息をつき、時折、ふるふると首を振りながら、ノエルは淫らな行為に没頭していく。
「あぁ……そ、そんなトコロ……おねがい、ゆ、ゆるしてっ……」
　あくまで、空想の中では、無理やりに体を犯されているだが、その手はすでに両方とも股間に回され、浅ましく快楽を汲み出していた。無論、処女であるノエルには、夫婦が閨の中でいかなる行為を行うのか、正確な知識はない。ただ、心の奥底に眠っていた浅ましい本能が、自身の一番感じる部分を残酷に責めたてることを、ノエルに教えたのだ。
　指の根元までを自らの分泌液に濡らし、右手でクレヴァスをこすりあげながら、左手で、包皮に包まれたままのクリトリスを刺激する。
「あふッ……！　あ、あああ、そこは、そこはダメーっ！」
　フードから敏感な肉芽を露出させ、愛液を塗りつけるようにくりくりと刺激しながら、ノエルははしたなく腰を浮かしてしまっていた。
「ンうううううううううううううううううううううウっ！」
　自らの未成熟な体を絶頂にまで押し上げたノエルは、びくん、と体を痙攣させた。
　そして、ぐったりと体から力を抜く。
「……ああ……また、しちゃった」
　ぬらり、といやらしい液に濡れた自らの指をぼんやりと見ながら、ノエルはつぶやいた。自慰のあとのけだるさと罪悪感が、じわじわとその胸に広がっていく。
「ダニル……」
　その名を口にすると、急に切なくなって、ノエルはぎゅっと大きなふわふわの枕を抱き締めた。

「ダニル」
　夜中、パーティーはようやく終わった。満月が西の空に傾きかけている。
　そんな折、騎士団長宅の庭に佇むダニルに、不吉なローブ姿の魔道士が声をかけた。
「おお、ハリウスか」
「先刻は、悪かったな」
「気にするな。悪竜討伐の戦友だろう、俺たちは」
　ダニルが、その彫りの深い顔に、裏表のない笑みを浮かべる。
「……王女殿下は、何と？」
「俺と同じ気持ちだと、そのようなことを、仰ってくださった」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　少年のようにはにかみながら、ダニルが答える。ハリウスは、フードの奥の顔に、複雑な表情を浮かべた。
　痩せた鋭い顔に、東方の血を受け継いだらしい、一重の目。瞳は黒く、そして、やはり黒かったはずの髪の色は、厳しい魔道の修行のためか、半ば白く変わっている。
「お前は、王女殿下に関する予言を知っているか？　ダニル」
「……？」
「『かの聖王女と結ばれし者、聖魔両王国の真の主君とならん』……殿下ご生誕の際に下された予言だ」
「ああ、聞いたことはある、が……しかし、俺は、玉座に野望など持っていないぞ」
　心外そうに、ダニルが言う。
「いや、俺も、お前を疑っているわけではない。ただ……せめて、レオン殿下のご即位までは、あまり軽率なことはしてくれるなよ」
「殿下のご即位？　……国王陛下のお加減は、悪いのか？」
「芳しくない。今のところ、お命に別状はないにしても、これからの激務に耐えられるかどうか……」
「そうか。だが、王子殿下が王位を継承されるにしても、すんなりとはいかんかもな」
　ダニルが、太い眉をしかめた。
　魔王ヴァルド・ネロが遣わした、あの巨大な竜を倒したとはいえ、アルメキアの宿敵ネルドールは健在なのだ。そして、そのような中で、片脚を失った国王や、虚弱な王太子に対し、不安の声をあげる貴族がいることも確かであった。
「……ところで、ダニル」
「なんだ？」
「あの、ギルド長のご令嬢……エレーヌ様との件は、どうするのだ？」
「それを言われると、辛い」
　ダニルは、その顔に沈痛な表情を浮かべた。
「だが、エレーヌ嬢は分かってくれた。彼女は……修道院に入られるそうだ。俺は、苦悩で胸が締め付けられる思いだよ」
「……」
　ハリウスは、表情を動かさない。
　しかし、その心中は穏やかではなかった。
（勝手に苦悩にひたってるがいいさ）
　苦労知らずの貴族の整った顔を眺めながら、ハリウスは思った。
（だが、自殺しかねんばかりだったエレーヌ嬢を説得し、怒り狂うギルド長をなだめすかして、お前の火遊びの始末をしたのは、この俺なんだぜ……）
　と、その時であった。
　ハリウスは、その脳髄を、細く冷たい針で刺し貫かれたような感覚にとらわれた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「何奴！」
　フードを跳ね上げ、後で結んだ半白の髪を夜風にさらしながら、邪悪な気配の方角に視線を向ける。
　そこに、一匹のコウモリが、宙を舞っていた。ハリウスは、一瞬で複雑な印を組み、鋭い気合とともに呪文を完成させる。
「どうした、ハリウス？」
「……いや」
　ハリウスは、息をついた。コウモリはハリウスの魔術から逃れ、飛び去ってしまっている。
「おそらく、ネルドールの間者だ」
「あのコウモリがか？」
「ああ……取り逃がしてしまったがな」
　言いながら、ハリウスは、未だ頭に残る不快感を取り除こうとするかのように、自らの広い額を右手で撫で上げた。

　どことは知れぬ、闇の中。
　地上は、明け方である。まるで朝日に追いたてられるように、一匹のコウモリが、その闇の底部に降りてきた。
　闇の中には、一人の男が佇んでいる。漆黒の、厚手のマントで全身を覆った、巨大な男である。
　いや、それを“男”と称していいものかどうか。
　それどころか、人間であるのかどうかさえ、判然としない。
　“彼”には、顔がなかった。いや、その部分に、まるで黒い靄でもかかっているかのように、顔の造作が曖昧なのである。まるで、有り余る魔力のために、顔の周辺の空間が歪んでいるかのようだ。
　ただ、その二つの紅い瞳だけが、この暗い部屋の中で、強い光を放っている。
「陛下っ！　アリエル、ただいま戻りましたア」
　場違いなほど明るい声で、“彼”の足元に降りたコウモリが言った。舌足らずな少女の声である。
　いや、それはもはや、コウモリではなかった。
　みりみりと音を立てながら、コウモリの形をとっていた体が膨れ、次第に人に似た姿をとりつつあるのである。
「……んんン……んッ……んくう……ッ」
　苦悶と歓喜をうかがわせる声をあげながら、それは、次第に一人の少女の形になる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ぷはアっ」
　ようやく、変身が完了した。
　男の足元に、全裸の幼い少女が、ぺたん、と腰を下ろしている。ちょうど、第二次性徴を迎えたばかりの年頃の少女である。その薄い胸は忙しく上下し、肩までのつややかな黒髪は、妖しく濡れていた。大きな黒目がちの目はやや吊り気味で、どこか悪戯っぽい光をたたえている。
「それが……あのハリウスの心の中にあった姿か……」
　低い、腹の底に響くような声が、“彼”の顔とおぼしき場所から発せられた。
「ケッサクでしょ。どんなボインのおねーちゃんがいるかと思ったら、こンななんだもん」
　“彼”の、圧倒的なまでの威圧感に、まるでひるむ様子も見せず、少女はあどけない顔に笑みを浮かべた。
「そこにこそ、あの男の弱みがある……」
　ぐつぐつと、何かが煮えるような音が、辺りの空気を震わせた。どうやら、“彼”が笑っているらしい。
「ねえ……ネロ陛下ぁ……」
　その可愛らしい顔に似合わない、ひどくねっとりとした視線を投げかけながら、少女は、膝立ちで“彼”――ネルドール魔王国の魔王ヴァルド・ネロの脚にすりよった。
「アリエル、疲れちゃったの……。陛下の、濃くて熱い精気、アリエルにちょうだァい……」
「確かに、だいぶ消耗している様子だな」
「だぁって、あのカタブツ、本気で突っかかってくるんだもン。ちょっと頭の中、覗かれたくらいでさ」
「その堅物とやらが、お前の主人となるのだぞ」
「分かってるってばア」
　そう言いながら、恐れ気もなく、立ったままのネロのマントを割り開き、その股間に顔を寄せていく。
「あはっ♪」
　嬉しげな声をあげながら、少女は、ネロの股間からグロテスクな器官を両手で取り出した。それは、確かに男性器に似てはいたが、はるかに長大で、不気味な青黒い光沢を放っていた。
「スゴい……陛下の、見てるだけで、おマタがうずうずしちゃうゥ……」
　少女は、飼い主に甘える仔猫のように、その奇怪な触手に右手を添え、すりすりと頬ずりした。そうしながらも、左手で自らの股間をまさぐっている。
「かつて、異界にてあの孤独な神に仕えていた身が、堕ちたものだな」
　小さな口を開け、生々しい淫臭を放つその触手の丸い先端を口に咥えている少女を、ネロが嘲る。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「天使が空に住んでるんだったら、あとは堕ちるしかないもン」
　少女は、鼻にかかった甘え声でそう言いながら、ピンク色の舌で、触手の先端の切れ目からにじみ出る汚穢な粘液を、おいしそうに舐めしゃぶった。
　はるかな次元の彼方のヘブライの神に、“神の祭壇の炉”の名を賜り、使役されていた天使アリエルが、あどけない少女の姿を取って、魔王を名乗るものに淫猥な奉仕を捧げている。
　そんなアリエルの幼げな四肢に、ネロのマントのすそから現れた何本のもの触手が、ぬらぬらと粘液をしたたらせながら、絡みついていった。
「ああン……」
　ヒトの亀頭に酷似した先端を有するその触手たちは、アリエルの動きを封じながら、そのほとんど膨らんでいない胸や、無毛の恥丘をまさぐり、無遠慮に分泌液を塗りたくった。きゃしゃなアリエルの体が、きらきらと淫らに濡れ光る。
「きもちイイ……ああン……すごいィ……」
　触手によるおぞましい愛撫に半ば身をゆだねながらも、アリエルは、ネロの男根――もしくは最も太い触手に、伸ばした舌を絡め、情熱的な口付けを繰り返した。その顔は、すえたような異臭を放つネロの粘液と、自らの唾液に無残に汚されながら、恍惚とした表情を浮かべている。
　アリエルの胸をまさぐっていた触手が、まるで蛇が口を開けるかのように、ぱっくりと先端を割った。以外と柔らかそうなその内部で、無数に生えた半透明の繊毛がざわざわとざわめいている。
　その触手が、すでに固く尖っているアリエルの乳首に吸いついた。
「ひあああああアッ！」
　乳首をきつく吸引されるともに、内部の柔らかい繊毛によってこすりあげられ、アリエルは高い声をあげた。
　吸いついた触手は、くいくいとアリエルの乳首を弄び、肉付きの薄い胸の形を変える。
　すでに、アリエルの、ネロの半分ほどしかない小さな体は、十を数える触手に支えられ、空中に浮いている。そして、アリエルの股間に潜りこんだ触手は、その幼げなクレヴァスを思う様になぶっていた。もはや、アリエルはネロに対して奉仕をするどころではない。
「ンあ！　へ、陛下、ソ、ソコはアっ！」
　触手に体を拘束されたまま、アリエルは、びくン、と体を痙攣させた。触手のうちの一本が、包皮に隠れていた肉芽を探り出し、乳首をそうしたようにきつく吸い上げたのである。
「んうううううううッ！　んぐッ！　ヒイイッ！　あいいいいイイイイイイっ！」
　目のくらむような激痛と快感に、アリエルは空中で空しくのたうち回った。食いしばった小さな口からは、だらしなく唾液がしたたり、目尻からは玉のような涙がこぼれる。
「あふッ！　ふあァ！　イ、イっちゃうッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　びくん、とアリエルの幼い体が、痙攣する。
「あああ、あ、あああアァ……」
　あっけなく絶頂を迎えたアリエルは、がくがくと触手と粘液にまみれた体を震えさせた後、がっくりと体から力を抜いた。
　その体を、触手たちは軽々と運び、大きくＶの字に脚を開いた姿勢で、ネロの腰の高さまで運んでいく。アリエルの股間は、みっともないほど大量の愛液を漏らし、まるで失禁してしまったかのようであった。
「んア……」
　ぴったりとネロのペニスが自身の小さな性器にあてがわれる感触に、アリエルは空ろな表情で目を開いた。
「くれてやるぞ、堕天使め」
「ふあァ……ちょ、ちょうだいッ……」
　涙と涎を垂れ流した哀れな顔で、それでもアリエルは、魔王の触手をおねだりする。
　そして、アリエルの腕ほどもあるその触手が、まるで独立した生き物のように、アリエルの狭い膣内にその身を侵入させた。
「んぎッ！」
　アリエルが、その大きな目を見開き、背中を弓なりに反らせる。
「ひあ……あああ……キ、キツい……キツいよう……」
　ぱくぱくと、空気を求めるように小さな口を開け閉めしながら、アリエルは涙声で訴えた。その膣口は血の気が引くほどに引き伸ばされ、下腹部はネロの性器の形に膨らんでいるように見える。
　しかし、触手たちはそんなアリエルの様子に構いもせず、乱暴に幼い体を上下させた。
「んあッ！　あ！　いアあッ！　し、しぬ！　しんじゃうッ！」
　ずりずりと巨大な器官がアリエルの小さな性器をえぐるたびに、アリエルは悲鳴をあげた。
「あ！　んふわあああああッ！　あひッ！　い！　ひあア！　ああああああああッ！」
　だが、その悲鳴は次第に甘くとろけ、苦痛とともに快楽を告げるものになっていった。
　それとともに、すでに大量の液を分泌していたはずのアリエルのその部分から、触手の出入りに合わせて、さらに愛液がしぶくように溢れ出る。
「ア、アリエル、もうダメ！　ダメなのッ！　ダメえ！」
　苦痛ではなく、明らかに快楽に狂乱し、アリエルは激しく首を振った。しかし、触手たちの運動はとどまるところをしらず、アリエルの乳首やクリトリスを吸引し、その秘めやかなアヌスまでも刺激する。
「ダメっ！　ダ、ダメダメダメ〜っ！　もう、もうダメなの！　おねがい、おねがいッ！」
　もたらされる快感を、その小さな体では処理することができないかのように、アリエルは激しく身をよじった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　触手たちが、ひときわその運動を加速させる。
「んあああああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアーッ！」
　アリエルが、ひときわ高い絶叫をあげたのとほぼ同時に、ネロの触手たちがいっせいに律動をはじめた。
　そして、それぞれの先端から、大量の白濁液を、アリエルの全身に浴びせかける。
　ぶびゅうっ、と驚くほどの音をあげ、ネロのペニスとアリエルのホールの隙間から、大量の粘液が溢れ出た。
「ふあああッ……あひ……ス、スゴい……いっぱい、いっぱいなの……」
　魔王の熱い体液を通し、凄まじい量の精気を吸収しながら、アリエルは至福の表情を浮かべていた。
　触手たちが、興味を失ったように、アリエルの体をネロの足元に横たえる。
「ふわァ……」
　しばらく後、ぼんやりと、アリエルは目を開けた。
　そして、がくがくと手足を震わせながらも、ネロの足元に犬のようにはいつくばる。
「んふ……もったいなァい……」
　そんなことを言いながら、アリエルは、床にこぼれ落ちたネロの体液を、ぴちゃぴちゃといつまでも舐めしゃぶるのだった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第二章

　宮廷魔道士たるハリウスの執務室は、広大な王宮の西の端にあった。
　威厳ある国王宮や、典雅な後宮、その主である双子のようにそっくりな王子宮と王女宮、そして王立議会議事堂などの、国政の中枢から少し離れた、鋭く天を突く尖塔の基部に、その部屋がある。
　ハリウスの執務室は、四方のほとんどが、分厚い書籍や、薬びんや水晶球、さらにはもっと妖しげな品々を収めた書棚に覆われていた。その隙間に、机や椅子が置かれている。
　すでに、小さな窓の外は暗く、わずかな夕暮れの残照が、赤黒く西の空を染めていた。
　ハリウスは自らの席につき、何やら書き物をしている。昼から、ずっとそうである。
　さすがに疲れたのか、ハリウスはその一重の目をしばし閉ざした後、ランプの火をさらに明るくした。
　そのオレンジの光に、机の上の書類が照らされる。レオン王子の教育に関する企画書や、魔道の研究論文に混じって、アルメキア、ネルドール両国全土を描いた詳細な地図がある。
　ハリウスは、ちらりとその地図を細い目でにらんだ後、机の傍らの呼び鈴を押した。ほどなく、背後の扉が開く気配を、その鋭敏な耳が捉える。
「ルール茶を……」
　従者にそう頼もうとして、ハリウスは絶句していた。
「……サラ」
　不覚にも、そう、声に出してしまう。
　扉の前には、髪を肩の上あたりで切った幼い少女が佇んでいた。あまり凹凸の目立たない肢体を、素朴な平民服が包んでいる。
「お久しぶり、お兄ちゃん」
　少女がそう言った時には、しかし、ハリウスの顔から再び表情が消えていた。
「あれ？　もしかして、お兄さま、だった？　それとも、まさか兄貴とか」
「その口を閉じろ、ネルドールの間者」
　そう決め付けながら、ハリウスは立ちあがり、書棚に立てかけてあった杖に手を伸ばす。
「おおかた、リリムやサキュバスの類いだろうが、俺は惑わされんぞ」
「そんな低級な夢魔なんかといっしょにしないでよ」
　くすくすと妖しく微笑みながら、少女はハリウスに近付いた。
「あたしは、アリエル。もともとは異界ヘブライの天使よ。あ、でも、そう呼びたいんだったら、サラって呼んでもいいンだけど」
「妹は、死んだ」
　黒い瞳に危険な光を宿らせながら、ハリウスはアリエルを睨みつけた。
「お前がどういうつもりか知らんが、そんな姿をとって俺の動揺を誘おうなどというのは、

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

全くの逆効果だ」
「そうかなぁ？」
　アリエルは、ハリウスのすぐ前にまで迫り、そして、ふわりと空中に浮いた。
「あたし、知ってるのになア。あなたが、妹にどんな想いを抱いていたか」
「！」
　何か言おうとしたハリウスの口を、アリエルは柔らかな唇で塞いだ。
　そのまま、うろたえるハリウスの首に細い両腕を絡め、顔をねじるようにして濃厚な口付けをする。
「ぷはっ」
　しばらくして、ハリウスの首に腕を絡ませたまま、アリエルが口を離した。
「キスなんて、ひさびさでしょ。……子どものころ、眠ってる妹にして以来だもんねェ」
「き、貴様……！」
　言いかけて、ハリウスは愕然とした。四肢が、痺れたように動かなくなっている。
　アリエルに唇を奪われた際に、すでに彼女の術中にはまっていたのだ。
「んで、三十間近だってのに、女を知らないまま……。人には、魔道の修行のためとか何とか言ってるけど、ホントは、死んじゃった妹への義理立てなんでしょ？」
「く……」
　ハリウスは、屈辱にきつく歯を食いしばった。そんなハリウスの首筋を、アリエルは指先と舌でねっとりと愛撫する。
「あたしが、あなたを解放したげる……ご主人サマ♪」
「なん、だと……？」
「今日からあたしが、あなたの奴隷になったげるの」
　舌足らずな声でそう言いながら、アリエルは床にひざまずき、ハリウスのローブの帯を解き、その前をくつろげた。
　そして、ローブと同色の、暗い青色のゆったりとしたズボンの股間のあたりに、小さな手を這わせる。
「だから、アリエルに、ご主人様の精気、ちょうだい……」
　アリエルは、布地の上から、固く強張りつつあるハリウスのその部分に、すりすりと頬ずりした。
「あはァ……ご主人様の熱い精気が、伝わってくる……」
「く……ぅぅ……」
　布越しの、じれったいような刺激に、ハリウスは思わず呻き声をあげていた。
　そして、アリエルに導かれるまま、椅子に腰掛けてしまう。
　アリエルは、そんなハリウスの目の前で、するすると身につけていた衣服を脱ぎ捨てた。
　痩せた、まだ硬さの残る体に、膨らみかけた胸と、丸みをおびつつあるお尻のラインが、独特の魅力をかもし出している。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

アリエルは、全裸になって、ハリウスの股間の部分の布を開き、その剛直を両手で丁寧に取り出した。
ハリウスのそれは、今や完全に天を向いて屹立していた。
「ご主人様の、すっごく元気……」
アリエルは、好物を前にした童女のようににこにこと微笑み、そして、わざとあーンと声に出して、ハリウスのペニスを咥えた。
「うッ……」
名状しがたい、生温かく柔らかな感覚に、ハリウスが声を漏らす。
アリエルは、まるで口腔粘膜でその部分の熱い温度や硬さを味わうかのように、しばらくじっと動きを止め、そして、そろそろと舌を竿の部分に絡め始めた。
「んむ……うン……んふ……ふぅン……」
かすかな鼻声を漏らしながら、アリエルはゆっくりとピストン運動に入る。可憐な桜色の唇を、唾液に濡れた褐色の牡器官が出入りする様が、ひどくなまめかしい。
「くぅ……ッ」
ハリウスは、思わず顔をのけぞらせた。敏感な雁首の部分を、アリエルの少しざらついた舌が奔放に刺激したのだ。
さらに、アリエルは口内からペニスを出し、唾液でぬるぬるになったシャフトをしごきながら、裏筋に舌を這わせ、陰嚢を優しく口に含んだ。かと思うと、舌の裏側の柔らかい部分で亀頭を刺激する。あどけない姿態に似合わない、娼婦顔負けの技巧である。
ハリウスのペニスは、鈴口からとろとろと先走りの汁を溢れさせ、アリエルはさも美味しそうにその苦い液体を舐めしゃぶり、すすりあげた。
ハリウスのその部分は浅ましく静脈を浮き出させ、びくびくとしゃくりあげるように律動している。
「うふっ……」
アリエルが、軽く亀頭にキスしたあとで、唾液の糸を引きながらその部分から口を離したとき、ハリウスは荒い息をついていた。
「お口でいただいてもよかったんだけど、やっぱり、アソコが、一番感じるから……」
あどけない顔に似合わぬ淫蕩な表情で、アリエルが微笑んだ。
「ご主人様ァ……アリエルに、ご主人様のどーてー、ちょうだい♪」
そんなことを言いながら、ハリウスの両手を取って、自らは黒色のじゅうたんの敷かれた床に倒れこむ。
ハリウスは、ぎくしゃくと体を動かしながら、アリエルの幼げな体にのしかかる姿勢になった。
「ふ、不覚だ……こんな魔族などに、いいように操られるとは……」
言いながら、ハリウスは、自らの自由を取り戻すのに必要な呪文を、必死になって思い出そうとする。

Yen PDF Driver Trial www.yen.com.tw

「あたし、ご主人様のコト、操ってなんかないもん」
　ハリウスの体の下で、アリエルは悪戯っぽくそう言った。
「なに？」
「ご主人様の欲望を、解放しただけ……♪」
　まるで、その言葉が鍵であったかのように、ハリウスは、体の自由を回復させていた。
　そして、自由になったその体で、アリエルの細い肩を掴み……
　そのまま、きつく抱き締めていた。
「んふ……♪」
　全身にハリウスの体重を感じながら、アリエルは満足そうな表情を浮かべる。
　そのアリエルの可憐な唇に、ハリウスは貪るような荒々しいキスをした。
　口内に侵入してくるハリウスの舌に、アリエルの舌が優しく絡みつく。
「んふン……ンう……うム……ふぅ〜ン……」
　アリエルは、うっとりと目を閉じ、脳を痺れさせるような媚声をもらす。
　ようやく、ハリウスは口を離した。そのまま、信じられないような顔で、間近にあるアリエルの顔を見下ろす。
「悪魔、め……」
　明らかに敗者の声で、ハリウスがつぶやく。
「“魔”ってのはサ、よーするに、人の欲望を肯定するコトでしょ」
　アリエルが、訳知り顔で言う。言いながら、その両手を、唾液に濡れ、むき出しになったままのハリウスの股間に伸ばす。
「魔法は人の欲望を叶える方法だし、魔道は人の欲望を満たす道、悪魔は……人の欲望に応えるために、悪を為すモノ♪」
　アリエルは膝を立てるようにして大胆に脚を開き、熱くたぎるハリウスの剛直を、自らの柔らかな部分に導いた。
「だから、いくら禁欲生活をおくっても、“魔”を制することはできないの。……“魔”を制するには、欲望を満足させながら、それを、コントロールしなきゃ……」
　ぴったりと、堕天使と魔道士の粘膜が触れ合う。
　先ほどの口淫でかなり興奮していたのか、アリエルの靡粘膜は愛液に濡れ、少しめくれあがるようにして息づいていた。その微細な動きが、亀頭の裏側を通じて感じられる。
　最後の一線を越えたのは、ハリウスだった。
　全くの未経験でありながら、牡の本能の命じるまま、アリエルの幼い秘部を貫くべく、腰を進ませる。
「ンアアアアアアッ！」
　ハリウスのその部分が肉襞をかき分け、膣壁をこすりあげる感覚に、アリエルは高い嬌声をあげた。
「ス、スゴい……ご主人様のオチンチン、おっきいィ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして、あどけない少女の顔からは考えられない、あけすけな言葉を口にする。
ハリウスは、最初から早いペースで、腰を前後させた。アリエルの肩を掴んで固定し、叩きつけるような勢いで、ピストン運動を繰り返す。
「ああッ！　ス、スゴい！　あ！　あン！　ンあッ！　ひあァ！」
アリエルは、眉を切なげにたわめながら、短い悲鳴で快感を訴える。
熱くとろけるようなアリエルの蜜壷は、柔らかい圧力でハリウスのペニスに締め上げ、内部で暴れ狂う剛直に絡みつくような動きを見せた。
「ぐうううううううううッ！」
ハリウスが、獣のような声をあげた。
そして、そのまま、あっけなく最後のときを迎える。
彼は、大量の精を、幼くして死んだ妹の姿をしたアリエルの体内に注ぎ込んだ。
「あはぁ……♪」
アリエルが、満足げなため息をつく。
「スゴぉい……どぴゅどぴゅぅって、いっぱい、出てる……。ご主人様の、あつい精気、かんじるの……」
恍惚とした顔でそう言うアリエルの体を、ハリウスはのしかかるようにして抱き締め、びくびくと体を痙攣させた。まどまとっている濃い青色のローブが、重なった二人の体を半ば以上隠してしまう。
ぐったりとなったハリウスは、犬のような荒い息を、アリエルの耳元に吐きかけていた。
「んふふ……ごちそうさまっ♪」
そんなことを言いながら、アリエルは、その細い両脚をハリウスの腰に絡めた。
「あ……」
ハリウスが、普段のカミソリのような彼からは考えられないような、呆けた表情をその顔に浮かべる。
「精気は、じゅーぶんもらったンだけどォ……アリエルのアソコ、まだ足りないの……」
はにかんだような表情で、アリエルはハリウスの体を横にくるりと半回転させた。ハリウスは、なされるがままだ。
そのままアリエルは、ハリウスの腰から自らの腰を離そうとはしない。自然、アリエルがハリウスの腰にまたがる姿勢になる。
ハリウスの男根は、やや力を失いながらも、アリエルの体内にとどまっている。
そのハリウスの器官を、ざわざわとした柔らかく微妙な蠕動が包み込んだ。
まるで、無数の微細な舌先で、細かく舐めあげられてるような感覚である。
「うぁ……」
思わず、ハリウスは声をあげていた。
ぞくぞくするような快感とともに、熱い血液がまたハリウスのペニスに集まっていく。
「あ、はァん……ご主人様のオチンチン、またカタくなってきたァ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

体内でペニスが硬度を増していく感じに、アリエルは喜悦の声をあげた。
そして、左右に投げ出されたハリウスの両手を持ち、自らの薄い胸に当てる。
「ね、ご主人様、分かる……？」
「……？」
ハリウスが、東方の血を色濃く受け継いだ顔に、どこか少年じみた表情を浮かべた。
「あたし、今、すごくドキドキしてるでしょ」
その言葉通り、ハリウスはその両手に、とくン、とくン、というアリエルの心臓の拍動を感じていた。
「えへ……動く、ね……」
照れたように笑いながら、ハリウスの両手を胸に押し当てたままの姿勢で、腰を動かしだす。
大量の蜜と、ハリウスが放ったばかりの白濁液が、二人の結合部から溢れ、じゅぼじゅぼという淫猥な音をあげた。
アリエルの小さな膣口を出入りするハリウスのシャフトは、その粘液に濡れ光り、まるで何か別の軟体生物のように見える。
「あっ……んふ……うぅン……んク……ふぅン……」
くいくいと幼い腰をリズミカルに動かしながら、アリエルが可愛い喘ぎ声をあげる。
ハリウスは、何かを求めるように差し出した両手に力を込め、発育を始めたばかりの胸に指を食いこませた。
「っはあァん！」
痛みを感じるはずのその仕打ちに、アリエルは高い嬌声をあげる。
「ンッ……はあァ……ごしゅじんさま……アリエルのおっぱい、もっとイジめて……！」
そう訴えながら、アリエルはますます大胆に腰をグラインドさせた。
ハリウスの手の中で、まだ乳房と言うのもためらわれるような胸のふくらみが、無残に形を変える。そのこりこりした青い感触の頂点で、小さな乳首が小生意気に勃起しているのが分かった。
「もっと、もっとキツくして……あッ、んあああああッ……！　イイっ……きもち、イイよう……」
いつしかハリウスは、下から腰を突き上げていた。
最初はぎこちなかったその動きが、次第に滑らかになっていき、今や、腰にまたがるアリエルの小さな体を翻弄するように上下させている。
ハリウスは、その切れ長の一重の目を閉じ、荒い息をつきながら、下からアリエルのことを責めたてていた。
「スゴい……ごしゅじんさまってば……んア……スゴい、スゴい、スゴいよお……ッ！」
アリエルは、舌足らずな声でそう叫びながら、いやいやをする童女のように首を振る。
「あ……も、もうダメ！　ダメぇ！　アリエル、もうダメだよう……ッ！　ふわ、あ、あ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

あアッ！」
　白く細い喉を反らせ、快楽を訴えるアリエルの背中に、二つ、縦に傷が走った。
　ちょうど、肩甲骨の内側あたりだ。
「あ、あああああああッ！　あひッ！　ひあああああああァ！」
　ひときわ高い声とともに、ぶわっ、とその傷口から、コウモリのそれに似た翼が生え出る。
「ンあ！　あ！　あああアア！　あああァアアアアアアアアアアアアアーッ！」
　ざん、と風を切り、漆黒の巨大な翼が、部屋一杯に広がる。
　そして、お尻の谷間の部分からは、しなやかな黒いムチのような尻尾が生えていた。
　半ば以上その正体をさらしたアリエルの腰の下で、ハリウスは、ひときわ大きく腰を突き上げる。
　幼い性器の一番奥まで侵入したハリウスのペニスが、断続的に熱い精液をアリエルの体内に叩きこんだ。
「イ、イク！　イクッ！　イク、イク、イク！　イクうううううううぅーッ！」
　感極まった声で絶頂を訴えるアリエルの頭から、一対の角が生え出ている。
「あ、アアアああ……ふわぁン……」
　ハリウスの体液から、命の源である精気をたっぷりと吸収しながら、アリエルはその姿のまま、ぐったりとハリウスの体の上に横たわった。

「ごしゅじんさまァ……」
　しばらく後、翼と尻尾、そして角を体内に収め、ただの少女の姿に戻ったアリエルが、ハリウスの痩せた胸に顔を乗せたまま、言った。
「あたしと、契約してよォ……悪いようには、しないからさ♪」
「……」
「別に、魂くれなんて言わないから……。ただ、ご主人様のオチンチンで、いっぱい精気くれるだけで、いいんだよ……。ご主人様だって、気持ちよかったでしょ？」
　そう言いながら、服の上から、ハリウスの胸板をまさぐる。
「そして、アルメキアを裏切り、ネルドールの手の者になれというのか？」
　どこか覇気の感じられない声で、ハリウスが訊く。
「ホントは、それが任務なんだけど……ご主人さまのオチンチン、あたしとすっごく相性イイんだもん」
「……」
「ん、もう」
　アリエルは、焦れたように言って、ハリウスの耳に唇を寄せた。
「それじゃ、とっておきのコト、教えたげる」
　そして、こしょこしょと何事かをつぶやく。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ハリウスは、半ば閉じていた目を見開いた。
「……それは、本当のことか？」
ハリウスの顔に、次第に鋭さが戻ってくる。その黒い瞳に、炯々とした、夜の星のような光が宿った。
「ホントだよッ。あたしの頭、覗いてみる？」
半身を起こすハリウスの首にかじりつくような姿勢のまま、アリエルが言う。
「……」
しかし、ハリウスは、答えなかった。
ただ、さしものアリエルでさえひるんでしまうような強い視線を、その顔に向けただけである。
アリエルは、その視線を正面から受けとめた。
そして――
次第に深まる闇の中で、魔道士ハリウス・スーマは、悪魔アリエルとの契約を交わした。

森の中を、王室仕様の馬車が走っている。
爽やかな昼下がりである。木漏れ日が、灰色の石が敷き詰められた街道を照らしている。
しかし、馬車の中のノエルは、浮かぬ顔であった。
「お父様のバカ……」
聖王女と称えられる身では口にすべきでない言葉を、涙混じりの声でつぶやく。
「ねえさま……」
ノエルと向かい合う形で、例によってクッションに身をうずめているレオンが、かすかにとがめるような声をあげた。
「なによッ！」
ノエルは、普段見せているこの病弱な双子の弟に対するいたわりを忘れたような顔で、きっ、とレオンの顔をにらみつけた。
「レオンも、お父様と同じなの？　あんな予言なんかに、心を囚われて！」
「……」
ノエルの剣幕に、レオンは沈黙で応える。
今日、二人は、片足を失って以来、王都アルムを離れて南の離宮で静養している国王を見舞いに行ったのである。
双子の父であるナンテスⅠ世は、いつものごとく、愛らしい王子と王女を歓待した。しかし、ノエルの話がダニルとの関係に及び、彼と婚約を結びたいと言い出した時、国王はその柔和な顔に苦渋に満ちた表情を浮かべたのだ。
「ノエルよ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　かつて英雄王とさえ称されたナンテスⅠ世は、歯切れの悪い口調で言った。
「お前も、知らぬわけではあるまい。お前が生まれた時の予言のことを……」
「……」
「『かの聖王女と結ばれし者、聖魔両王国の真の主君とならん』……お前を娶ったものは、魔王国に通じた上で、聖王家に対する簒奪者になるやもしれんのだ。それを、忘れたわけではあるまい」
「それは……」
　ノエルは、可愛く唇を尖らせながら、答えた。
「でも、結局、魔道士が訳も分からずにさえずった、ただの曖昧な予言でしょ。お父様やあたしが気にするようなことじゃないわ」
「魔道は、恐るべき力だ。最愛の娘よ」
　ナンテスⅠ世は、諭すような口調でノエルに言った。
「それを軽視してはならん。ダニル将軍とのことは、少なくとも今は、許すことはできん」
「お父様！」
「許せ……これは、アルメキアの聖なる国土を預かる国王の命令と心得よ」
　ナンテスⅠ世の宣言に、ノエルはきつくその小さな拳を握った。その姿を、レオンが痛ましそうな表情で見つめている。
　そして、三人の親子は、互いに言葉少なに別れを告げたのだった。
「お父様は、あたしに一生独りでいろっていうつもりなのかしら……」
　馬車の中で、ノエルの恨み言が続いている。
「そんなコト、ないと思うけど」
　レオンが、その美しい緑色の目に涙をためている姉を慰めるように、言う。
「それに、あの予言については、ハリウスたちが一生懸命、研究してます。だから、その意味するところも、いずれ明らかになりますよ」
「……」
　その時、不意に、馬車が止まった。
　それも尋常の止まり方ではない。急停止である。ノエルとレオンは、あやうく馬車の床に投げ出されそうになる。
　無論、まだ王宮に着いたわけではない。それどころか、森を抜けてさえいなかった。
　馬のいななきに、護衛の近衛騎士たちの怒号が重なる。
「何？」
　気弱な弟に代わって、ノエルが、窓の向こうに座る御者に問いただす。
　ざっ、とその窓を赤いしぶきが叩いた。
「きゃあああああッ！」
　御者には、首がなかった。
　窓のしぶきは、その御者が頭部を失ったときに溢れた血だったのである。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

いつしか、騎士たちの声は止んでいた。
ノエルは、震える手で、それでも勇敢に、馬車の扉を開いた。
「ひ……！」
両の拳を口元に当て、息を飲む。
騎士とその乗馬は、ことごとく地面に倒れていた。その体に、日の光が場違いなほど明るくさんさんと降り注いでいる。
騎士たちは、例外なく致命的な一撃を受けているらしく、自らの作った血だまりに沈み、ぴくりとも動かなかった。
王都のほど近くということで、護衛の近衛騎士の数は確かに少なかった。それでも、ほぼ一瞬にして五人の騎士が屠られたのだ。御者を含めれば、犠牲者は六人である。
襲撃者の姿は、今は見えない。
一度にこれだけの、しかも酸鼻を極める死体を見るのは、無論、初めてのことである。ノエルは、立っているのがやっとであった。
そのノエルの前に、ゆらりと、ローブ姿の男が現れた。
「殿下……お迎えに上がりました」
男が、慇懃な態度でそう言う。
「ハリウス……」
ノエルが、ほっとしたようにつぶやいた。たとえ気性が合わないにしても、ハリウスが王家の忠実な臣下であるということだけは、ノエルも認めている。
が、そのノエルの眉が、不審げにひそめられた。ハリウスの傍らに、まだ年端も行かぬ、平民服の少女がよりそっていたのだ。
少女は、そのあどけない顔に、無邪気な笑みを浮かべながら、ノエルの蒼白の顔と、騎士たちの死体を見比べている。
「ハ、ハリウス、そのコは……」
その少女に、喩えようもない邪悪さを感じて、ノエルは声を震わせた。
「妹……のようなものですよ。本物の妹は、十五年以上も前に、誰とは知らぬ者の馬蹄にかけられ、息絶えましたがね」
ノエルは、まるで自分が悪夢の中に迷い込んでしまったように感じていた。およそ現実感のない陰惨な風景の中で、不吉な魔道士が、低く響くような声で何かを言っている。
「ちょうど、殿下のご生誕で、国中が沸きかえっていた時期でした。早馬もそこら中、行き来してましてね……結局、誰が妹を殺したのかは、分からなかったのです」
「……」
「私は、半ば自暴自棄になって、魔道士としての修行を始めました。そして、意外にも身に余る栄誉と地位を賜ったのですが……しかし、仇は、思いのほか近くにいたのですよ」
「まさか……彼らが……？」
ノエルは、震えながら、横たわる死体をちらっと見た。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「彼らは当時、祝賀の酒に酔って市中を暴走していた、若い騎士見習の連中でした。私は、何人もの人々の精神を操作して、彼らを再び一箇所に集めたのです。それが、この場だったのですよ」
「……お前が、彼らを殺したの？」
「はい」
　あっさりと、ハリウスは肯く。
「私にとっては、これが終わりなのですが……」
　ハリウスは、手に持つ杖で、ノエルとレオンが乗り込む馬車を指し示した。
「殿下にとっては、これが始まりです」
「きゃっ！」
　本能的に身の危険を感じ、馬車を飛び降りようとしたノエルの足元が、ぐらりと揺れた。
　馬車が、その馬車を引く四頭の馬ごと、宙に浮いたのである。
「レオンっ！」
　ノエルは、悲痛な声をあげて振りかえった。レオンは、顔を真っ青にして、馬車の中で失神している。
　今なら、そしてノエルだけなら、飛び降りることができたかもしれなかった。しかし、ノエルにとってレオンを見捨てることなど、できることではない。
　馬車は、魔道の力場に包まれ、高々と宙に浮いた。馬たちは悲しげないななきをあげながら、懸命に、何もない空中で足を動かし、身悶える。
　ハリウスが、さらに複雑な呪文を唱える。
　怪音が、蒼穹を切り裂いた。高い、乙女の悲鳴のような声が、いくつも重なる。
「……さ、いくぞ」
「はァい♪」
　ハリウスは、軽々と飛び上がり、空中にある馬車の御者台に降り立った。アリエルが、それに続く。
　その馬車を引く馬たちは、いずれも、翼を持つ不可思議な怪物に変身させられていた。猛禽の上半身と馬の下半身という、ありうべからざる体を有する、ヒポグリフと呼ばれる幻獣である。
「あぁ……」
　ノエルは、ぺたん、と馬車の床に座り込んでしまった。その馬車の扉が、音をたてて自動的に閉まる。
　ハリウスは、御者台に未だ座っていた死体からムチを奪い、死体の方ははるか下の地面へと無造作に転げ落とした。
　そして、赤く目を血走らせたヒポグリフにムチを入れる。
　幻獣たちは、高い声をあげ、その翼を羽ばたかせた。
　馬車が、天を滑るように飛ぶ。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「あ……」

ノエルの精神は限界を迎え、双子の弟に折り重なるようにして、気を失った。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第三章

「馬鹿者ッ！」
　ダニル将軍は、宮殿の一角で、報告に来た若い騎士の頬を、思わず殴りつけていた。
「それでもお前は近衛騎士か！　何も分からぬとはどういうことだ！」
「も、もうしわけ、ございません……」
　赤く染まる頬に手をやることもなく、唇に血をにじませながら、直立不動の姿勢で騎士が答える。
「殿下……」
　ダニルが、その精悍な顔に似合わない、焦燥の表情を浮かべながら、つぶやいた。
　ただ、アルメキアの二人の「殿下」のうち、ダニルがその身を案じているのは、その片方のみではあったが。
「お前では埒があかん……。ハリウスは、どこだ？」
「そ、それが……」
　騎士が、言いにくそうに、それでも幾つかの目撃談を総合した内容を報告する。
「何だと……奴め、裏切ったのか？」
「は……。殺害された護衛の騎士たちの死因も、魔道によるもののようです」
「……魔道士め！」
　ダニルは、したたるような憎悪と、そして隠しようのない侮蔑を込めて、短くそう言った。

　ネルドール魔王国の王都、ヴァルディア。
　都とはいえ、その実、砦に近い。ネルドールとアルメキアの間に横たわる山脈に連なる火山地帯に建てられた、巨大な石の要塞である。
　ごつごつとした溶岩台地の上にある、高い城壁と幾本もの鋭い尖塔を備えたヴァルディアの都は、まるで異界の魔獣がうずくまっているかのように見えた。
　その都の中央に位置する、ヴァルド・ネロの居城。
　さらにその地下深くに、ノエルは捕らえられていた。

「んんン……」
　ノエルは、その部屋の中央で、小さくうめきながら、ゆっくりと目を開いた。
「ここ、は……？」
　硬い石造りの床に手をつき、半身を起こしながら、ノエルがつぶやく。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そこは、石組みの地下牢だった。
が、地下牢としては異様な場所である。中央には豪奢な寝台があり、その寝台に向かい合うように、巨大な石造りの椅子が備えつけられている。
寝台も椅子も、貴人を迎えるにふさわしい、派手ではないが最高の装飾が施されていた。それでいながら、地下牢の天井からは何本もの鎖が下がり、壁には、やはり鎖でつながれた手かせが下がっている。
出入り口は、重そうな金属製の扉が一つ、あるきりである。扉には、のぞき窓と、そして食事を差し入れるためのものらしい、やや大きめの隙間がある。無論、抜け出るどころか、ノエルの細い腕を通すのが精一杯の高さしかないが。
「なんなの、ここは……」
自らの細い肩を抱くような姿勢で、ノエルはつぶやいた。自分の体が、細かくふるえているのが感じられる。
寒いわけではない。それどころか、部屋の中は不自然なほどに暖かだった。
と、重く錆びた音をたてて、扉が開いた。
「ようこそ、アルメキアの聖王女よ」
ひくくひずんだ声が、地下牢に響く。
「何者？」
きっ、とノエルは声の主に視線を向けた。見上げるような大男だが、ひるんだ様子は見せない。
「ネルドール魔王国の王、ヴァルド・ネロ」
男は、そう言いながら、地下牢に足を踏み入れた。
その背後で、手も触れていないのに、扉がきしみをあげながら閉まる。
「お前が、ネロ……」
ノエルは、ネルドール魔王国の魔王、ヴァルド・ネロを、その美しい緑色の瞳でにらみつけた。
厚手のマントをはおったその男の顔は、まるで部屋のランプの明かりがそこだけ届いていないかのように、判然としない。ただ、その顔があるはずの場所に、赤く光る目が浮かんでいるように見えるだけである。
しかしノエルは、そんなネロの不気味な様子に、いささかも怯えの色を見せなかった。
「仮にも王を名乗るものが、隣国の貴人にこのような仕打ちをするのは、無礼ではありませんか？」
「勇ましいことだ」
ネロが、低い、笑い声のようなものをあげる。
「惜しむらくは、この現状を認識する知恵を持たぬことだが……しかし、その勇気に免じて、選択の余地を与えよう」
「……何ですって？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「お主がとるべき道は二つだ、王女よ」
　ネロは、ノエルに向かって一歩踏み出した。思わず後ずさりしそうになるのを、ノエルはなんとかこらえる。
「一つは、我が妻となること」
「ば、馬鹿なことを！」
「そうかな……？　もう一つは……我が奴隷となることだが」
「下司！」
　思わずノエルは、ネロを、聖王女と呼ばれる身としてはいささか激しい言葉で罵っていた。
「お前は、憎むべき悪竜を遣わし、アルメキアの多くの善良な民を苦しめ、勇敢な兵たちを殺した敵だ！　さらには、最愛の父の足を奪った憎むべき仇！　そんな者の言うなりになど、誰がなるものですか」
「クククククククク……」
　ネルドールの魔王、ヴァルド・ネロは、心底愉快そうに笑った。
「誇り高き傲慢さだ。気に入ったぞ……。予言の件がなくとも、是非ともお主を手に入れねばな」
「予言……」
「『かの聖王女と結ばれし者、聖魔両王国の真の主君とならん』……」
　ノエルは、唇を噛んだ。どこにいても、自分にはその忌まわしい予言がついて回る。そう思った。
「下らぬと言えば、下らぬ予言だ。しかし、お主を、このような予言を目当てとする男どもにくれてやるのは、いささか惜しい」
「か、勝手な事を……」
　声に怒りをにじませながら、ノエルが言う。
「返事がまだだな。王女よ」
「返事？」
「我が妻となるか、それとも、奴隷となるか」
「どちらもお断りよ！　もし無理やりに私に何かしようというなら、舌を噛んで死ぬわ！」
「ほう」
　ネロは、馬鹿にしたような声をあげた。
「屈辱よりは死を選ぶというのか。立派な覚悟だと言いたいが、その実、忌むべき短絡だ」
　言いながら、ネロは、身にまとう漆黒のマントを、自ら割り開いた。
「ひッ！」
　ノエルは、悲鳴をあげた。
　マントの中身は、いかなる意味でも、ヒトの肉体ではなかった。
　それは、肉色の触手の集合だった。様々な太さの、ぬらぬらと粘液に濡れた無数の触手

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

が、紅い瞳を有する頭部を支えているのである。
　しかし、ノエルが思わず悲鳴をあげたのは、そのネロの姿を目にしたためではなかった。
「レ、レオン……」
　ネロの触手に半ば以上その体を覆われた、アルメキア王国の王太子が、そこにはいた。
　レオンは、ノエルによく似たその顔を蒼白にし、肩のところで切りそろえられた金髪を乱れさせながら、がっくりとうなだれている。
　彼は、全裸であった。その体にはネロの触手がびっしりとまとわりつき、腰から下はほとんど隠されている。それはまるで、美しい魚が、おぞましいイソギンチャクに今まさに捕食されているところを思わせた。
「レオンに、何をしたの？」
　ノエルが、声を震わせながら、訊く。
「まだ、何も」
　そう答えるネロの触手が、レオンの細い首にするすると絡みついた。
「やめて！　弟は、体が弱いの！」
　ノエルは、悲鳴のような声で言った。
「無理なことをしたら、死んでしまうわ！」
「屈辱よりも死を選ぶのが、聖王家ではないのかな……」
　レオンの、少女じみた美しい顔をぬらつく触手でなぶりながら、ネロが言う。レオンは、意識がほとんどないらしく、半ば閉じられたその紫色の目には、何も映っていない。
「卑怯者っ……」
「我の評価など聞いてはおらん。ネルドール王国王妃の地位か、それとも、奴隷か？」
「……」
「どうした？」
「ど……どれい、に……」
　ノエルは、まるで血を吐くような思いで、ようやくそう言った。
　聖王女と称えられた身でありながら、自ら奴隷であると言う屈辱に、ノエルは全身を細かく震わせる。
　しかし、目の前のこのおぞましい怪物の妻になるなどということは、ノエルには考えることすら忌まわしかった。
「奴隷に、なります……」
　ネロと、そして自らを襲う理不尽な運命への怒りに、ノエルが小さな拳をきつく握る。
　しかしネロは、そんなノエルの様子になど、いささかも心を動かされないように見えた。
「ならば、その服を脱げ」
「ええッ？」
「ネルドールでは、奴隷は服をまとわない」
　残酷なまでに淡々と、ネロは言葉を続けた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「まさか、奴隷であると宣言するだけで、姉弟ともども許されると思っていたのか？」
　ノエルは、血がにじむほどに唇を噛んだ。
　そして、ゆっくりとうなだれ、手を後ろに回して、まとっているドレスの留め紐をほどいていく。
　片脚を失った父王を見舞うために選ばせた、落ちついた淡い青のドレスを、ノエルは、のろのろと脱いでいった。
　時折、どうしようもなく手が止まってしまう。そうすると、ネロは無言でレオンの体にまとわりついた触手を締め上げ、レオンに細い呻き声を上げさせた。
　とうとうノエルは、褐色の革のコルセットを身につけるだけとなった。その足元には、脱ぎ捨てられた最高級のシルクのドレスが、ふわふわとわだかまっている。
　コルセットなど全く必要がないくらいに細いノエルの腰に比べ、むきだしになったその胸は、意外と豊かである。しかし、その形はあくまで美しく、柔らかな曲線を描きながらも、薄桃色の乳首を上に向けている。
　ノエルは、右腕でその胸を隠し、左手で、やはりむきだしになった股間を隠した。
「手をどけろ、ノエル」
　ネロが、わずかに声のトーンを変え、言った。
　しかし、ノエルは、まるでそのような言葉が耳に入っていないかのように、じっと動かない。
「どけろ」
　ネロが、繰り返す。しかし、ノエルは無言で、ネロの赤い目を見返すだけである。だが、その深い緑色の瞳から放たれる視線は、かつてほどの力を失っていた。
　突然、ネロの触手が、数本、宙を走った。
「きゃッ！」
　鞭のように四肢にからみつく触手のおぞましい感触に、ノエルが悲鳴をあげる。
「イ、イヤ！」
　触手は、意外なほどの力で、ノエルの腕をしめつけ、ゆっくりと左右に開いていった。
「う、うううぅぅ……」
　ノエルが、小さくうめきながら、両手に力を込める。しかし、それははかない抵抗でしかない。
　とうとう、ノエルの白い双乳と、そして、淡い金色の体毛に覆われた恥丘が、ネロの赤い目にさらされた。
「あぁ……」
　絶望に満ちたため息をあげ、ノエルはがっくりとうなだれた。
　羞恥と屈辱、そして、うごめき、脈打つ触手への不快感に、目の前が真っ暗になる。
　そんなノエルの、雪のように白い体を、新たな触手が、ぞろりと撫で上げた。
「ひあっ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ノエルの悲鳴を、まるで天上の音楽ででもあるかのように感じているのか、ネロは表情の判然としない顔にある両目を、わずかに細めた。
「お……お前は、何者なの……人間では、ないの……？」
すぐ目の前で、蛇のように鎌首をもたげる赤黒い触手を思わず見つめながら、ノエルは、怯えを隠しきれない声で訊いた。
「我は、人間だ。これでもな」
ネロの声には、嘲弄の色がある。
「そ、それでは、その姿は……」
「魔道の賜物だ、王女よ。魔道は、人のあらゆる意思や欲望を具現化する。物質は精神に正しく支配され、姿形などは、文字通り形骸と化すのだ……分かるか？」
ノエルは、ふるふると首を振った。それは、ネロの言葉に対してではなく、次第に顔に近付きつつある触手を避けようとしてのことであったが。
「少なくとも、我が、かつて母と呼んだ人間の胎内から生まれたことは、間違いない。それゆえ……」
言葉を続けながら、ネロは、ノエルの可憐な唇にその触手を押しつけた。
「や、やめ……んぷっ！」
反射的に悲鳴をあげかけたノエルの口内に、ネロは無理やり触手をねじこむ。意外なほどの熱さと、びくびくという脈動が、ノエルの口腔や舌に伝わった。
「それゆえ、お主の胎内に我が子を宿らせることもできる」
「んんんんんンーッ！」
ノエルは、口の中を犯す触手の感触よりも、ネロの言葉に、くぐもった悲鳴をあげた。そして、自由を奪われた体をよじって、どうにかこのおぞましい緊縛から逃れようとする。
が、ネロは、そんなノエルの白い裸身に、一本、また一本と、粘液に濡れた触手を絡めていった。触手は、その得体の知れない粘液を塗りたくるように、無遠慮にノエルの体をまさぐる。
いつしか、触手たちは器用にもノエルのコルセットを外し、彼女を全裸にしてしまっていた。
「くッ……！」
ノエルは、きつく目をつむり、思いきり口内の触手に歯を立てた。
びくん、と、ノエルを犯していた触手が痙攣し、そして先端から大量の生臭い液体を噴き出す。
「ンぶっ！　ん！　ンン！　ンうーッ！」
ノエルは、その小さな口から、白濁した粘液をあふれさせながら、悲痛な声をあげた。
びくっ、びくっと律動しながら触手が放つ大量の粘液を、ノエルは、なすすべもなく、涙をこぼしながら飲みこんでしまう。
しばらく後、唾液と粘液にまみれた触手が、ノエルの口からずるりとその身を引いた。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

「ンぶっ……んぐ……えええっ……」
　はぁはぁと荒い息をつきながら、ノエルは、喉奥にからみつく汚穢な液を吐き出そうとする。
「躾のなっていない王女だな」
　触手をノエルの形のいい顎にかけ、ぐい、と持ち上げながら、ネロは言った。
「こともあろうに、噛みつくとは」
「……」
　ノエルは、ありったけの憎しみを込めて、ネロの赤い瞳を見返している。
「奴隷は、鞭を以って躾ねばならん」
　そう言いながら、ネロは、一本の触手をノエルの目の前でゆらめかせた。と、その先端が何本にも分かれ、房状になる。
「……？」
　その触手は、不審げな顔をするノエルの背後に周りこみ、そして、大きく宙を薙いだ。
　びしッ！
「きゃああッ！」
　激しい音に、ノエルのあられもない悲鳴が重なった。
　ちょうど、拷問用の九尾鞭のような形の触手が、ノエルの白いお尻をしたたかに叩いたのだ。
　きめの細かい絹を思わせる肌に、無残な赤いミミズ腫れが走る。
　続けて、二度、三度、両手を広げた形で戒められたノエルの背中や尻たぶを、触手が容赦なく打擲した。
　白い肌に、赤い傷が縦横に走り、血をにじませる。
「……んぐ！　……ンッ！　くぅッ……！」
　しかしノエルは、必死で悲鳴を噛み殺した。獣のように鞭打たれても、聖王女としての矜持を守るべく、泣き喚くような真似だけはすまいと咄嗟に決心したのである。
「……」
　ネロは、無言でノエルの華奢な体を打ちつづけた。
　次第に、鞭の痛みは痛みでなくなり、ただの熱い温度となって、ノエルの体を包み始めた。
（……これは……なに……？）
　ノエルは、自らの体内に生じた変化に戸惑っていた。
　鞭によってもたらされた温度が、次第に体の奥底まで届き、何とも言えない疼きに変わってきたのである。
「はぁ……んうッ……くぅ……んうゥ……」
　いつしか、ノエルの声は、わずかに甘く濡れ始めていた。自分では意識せず、舌で唇をなめ、太腿をもじもじとすり合わせる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　その変化を認めたためか、ネロは、ようやく触手による鞭打ちを止めた。
「あァ……」
　ノエルは、我知らず熱い息をついていた。体内に生じた疼きが、はっきりとした甘く切ない感覚となって、ノエルの体の一番秘めやかな部分を責めさいなんでいる。
「どうした、ノエル……脚が震えているぞ」
　ネロの指摘通り、ノエルの脚は、かくかくと細かく震えていた。もし両腕をネロの触手に捕らえられていなかったら、そのままへたりこんでいたかもしれない。
「な、なに……？　私のからだに、なにを、したの……？」
　ノエルが、額に汗をにじませながら、力ない声で言う。美麗な顔は戸惑いの表情を浮かべながらも、どこか上気し、そのエメラルドのような瞳は涙で潤んでいた。
「……」
　ネロは、答えない。ただ、その不吉な血の色の瞳に、嘲弄に似た光を浮かべるだけだ。
　ノエルは、酒に酔ったような熱くまとまらない脳で、どうにか理性を保とうとした。しかし、ともすれば耐え難いまでになっている体内の淫らなうねりにのみこまれ、ネロの触手がにじませる粘液の牡くさい性臭までが、好ましいもののように思われてしまう。
（なんてことなの……私が飲まされたアレは……麻薬のように、心と体を冒すのだわ……）
　ノエルは、その唇を噛み締めた。
（ダメよ、ダメよ、ノエル……負けちゃダメ……負けるものですか……）
　そんな聖王女の決意をあざ笑うかのように、数本の触手がノエルの形のいい乳房にからみついた。
「ふわぁっ！」
　ぐにぐにとその胸をぬらつく触手で思うさま嬲られ、ノエルは他愛なく声をあげてしまう。
「イ、ヤ……イヤあッ！　ダメ……こ、こんなの……ンあああぁアッ！」
　と、触手の一本がその先端を蛇の口のようにぱっくりと開いた。そのまま、すでに痛いほどに勃起しているノエルの可憐な乳首を、ちゅうーッと吸引する。
「んわあぁぁぁぁぁアーっ！」
　痛みと、そして明らかな快感に、ノエルはびくンと体を痙攣させた。
　今や、無数の触手がノエルの裸身にまとわりつき、ぬらぬらと粘液を滴らせながら、そのピンク色に上気した肌を愛撫していた。傷つき、敏感になった背中に、触手の分泌液が沁み込み、なぜかそれが心地よく感じられる。
　ベッドの中で、惨めな思いで自らを慰めていたときとは比べ物にならない快感は、ノエルの神経を焼き切りらんばかりであった。
　きつく閉じ合わされていたはずのノエルの細い両足はすでに大きく開き、やはり何本もの触手が、ぞわぞわと蠢きながらまとわりついている。ノエルは、無意識に腰を前後に動かし、局部に押し当てられた触手に、自身の最も柔らかな部分を擦りつけていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ア、んああア……ッ！　はあン……ダ、ダメ……ダメっ……ダメぇ！」
　ノエルの体が、これまで感じたことのないような、激しい絶頂を迎えようとする。
　と、意地悪く、股間にわが身を押し当てていた触手が、その身をかわした。
　その表面は、ノエルの分泌した液によって、熱く濡れている。
「あ……」
　かすかな理性の光が、ノエルの瞳に戻った。
「気付いたか？　自身の本性に」
　ネロの言葉によって、今まで自分が演じていた浅ましい動きを思い知らされ、ノエルは羞恥に顔を真っ赤に染めた。
「ひきょうもの……」
　ノエルが、力なくつぶやく。
　そのノエルの白い体を、無数の触手が軽がると持ち上げた。
「い、いや……ッ！」
　空中で、はしたなく脚を広げられ、ノエルがふるふると首を振る。その度に、長い豪奢な金髪が揺れた。
　ノエルの、最も恥ずかしい部分では、ネロの粘液と、彼女自身の愛液に濡れたスリットが、柔らかくほころびている。わずかにのぞいた肉襞は美しいピンク色をしており、まるで南洋の花が咲きかけている様を思わせた。
　その秘めやかな器官に、数本の触手がまとわりつき、先端から生え出た無数の繊毛で、ぞわぞわと撫で上げる。
「ンああ……あはァ……あく……ンくううぅ……」
　官能の炎に再び油を注がれ、ノエルはがくがくとその身を震わせた。
　ノエルの股間からは、止めどもなく透明な愛液が溢れ、ネロの粘液と交じり合い、零れ落ちる。
　その淫猥なしずくは、まるで壊れた人形のようにネロの足元に横たえられているレオンの体に滴っているのだが、ノエルは、そのことに気付いてはいなかった。レオンは、未だその半身に触手をまとわりつかせたまま、姉の痴態など知らぬげな空ろな顔で、ぴくりとも動かない。
「あふっ……ふあぁ……ンあ……あああアぁ〜ッ！」
　ノエルは、またもや快楽に理性を駆逐され、はしたなく腰を動かしてしまう。
　そのノエルの秘部を、触手たちがぱっくりと左右に開いた。鮮やかな赤色の肉の穴が、生温かい外気にさらされる。
　その部分に、いつの間に現れたのか、青黒い触手がぴったりと押し当てられた。
　その、人間の陰茎に似ていなくもない不気味な器官は、まるでそれ自体独立した生物のように、はっきりとした意思を持って、ノエルの陰部をぐりぐりと嬲る。
「あ、あああああぁぁン……ンあぁ……ンくうぅ……ッ！」

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

ノエルは、たまらず白い喉を反らせ、悦楽に濡れた喘ぎ声をあげる。
ネロの、その一際大きな触手が、とうとう、ノエルのクレヴァスに頭を潜りこませた。
それは、ゆっくりと、しかし圧倒的な力でもって、ノエルの体内に侵入していく。
「あああああああああああああッ！」
体が内側から押し広げられるような感覚。
しかし、ネロの体液に冒されたノエルの身体は、それを強烈な快感として感じてしまっていた。
「イ、イヤ……イヤよ……イヤ、イヤあぁ……」
童女のように首を振り、弱々しく拒絶の言葉をあげるのは、わずかに残った理性と矜持の、最後の儚い抵抗でしかない。
（……たすけて……ダニル……おとうさま……おかあさま……レオン……）
ノエルの目蓋の裏に、愛しい人々の顔が浮かんでは、溶けるように消えてしまう。
代わって、巨大な赤い瞳が、闇に閉ざされたはずの視界一杯に広がった。
（あああ……っ）
ノエルは、心の中で、敗北の声をあげていた。
ネロのペニスが、ノエルの狭い肉の通路を進み、純潔の証を、易々と貫こうとする。
「あ……！」
びくン、と無数の触手に持ち上げられたノエルの体が、弓なりに反った。
そして、おぞましい触手が、ノエルの処女膜を破り、彼女の体内の最深部にまで達する。
「あああアーッ！」
破瓜の激痛と、それを上回る凄まじいばかりの快感に、ノエルは鮮血とともに高い声をほとばしらせた。

床に横たわるレオンの、半ば閉じられた目蓋が、ぴくりと動いた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第四章

　ノエルは、乾いた粘液にまみれた惨めな姿で、目を覚ました。
　形ばかりは豪奢な寝台にいつのまにか横たえられていた体を、そっと起こす。
「う……」
　そして、股間の、まるでまだ何かが挟まっているような異物感に、思わず呻き声をあげた。
　その感覚をきっかけに、寸断された記憶が、次第によみがえってくる。
　これまでに見た最悪の悪夢でさえ遠く及ばないような、忌まわしい体験だ。
「う……ぅくっ……んんっ……」
　ノエルは、小さく嗚咽を漏らしていた。聖王家の王女としての誇りも、その哀れな泣き声をおし止めることはできない。
　不気味な触手の怪物に汚され、思うさま嬲られ、愛する人に捧げるはずだった純潔を散らされてしまった。
　ノエルにできるのは、どうしようもなく溢れる泣き声を、細く抑えることだけだった。
　と、そのとき、こんこん、という場違いなノックの音が響いた。
「入りますよー」
　そして、妙に明るい少女の声が、思い金属のドアの向こうから響く。
　ノエルの返事を待たずに、ドアが開いた。
「え……？」
　ノエルは、涙に濡れた緑色の目を見開いた。
　入口から入ってきたのは、魔王の城の住民とはとても思えないような、メイド服をまとった黒髪のあどけない少女だったのである。
「あ、あなたは……？」
　ようやく、ノエルは、彼女がハリウスの横に寄り添っていた少女であることを思い出していた。
「あたし、アリエルです。王女サマ♪」
　ニコっ、と無邪気に笑いながら、メイド姿の少女は言った。その笑顔は、この不気味な地下牢の中で、ひどく場違いである。
　そんな表情のままで、アリエルは、まだ開いたままのドアの方に向き直って、ちょいちょいと指を動かした。
「……！」
　ノエルが、息を飲む。大きな入口にぎりぎりいっぱいくらいの、銅製のバスタブが、半ば空中に浮かんで、部屋の中に入ってきたのである。
「ゴメンなさいね。この部屋、急ごしらえなんで、おフロ、入れ忘れちゃってて」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そう言うアリエルの前を横切って、バスタブは石組みの床の上に着地した。その中には、満々と湯が満たされている。香草の束がひたされているらしく、その熱い湯気は、どこか妖しい香りでノエルの鼻孔をくすぐった。
「さ、王女様、入ってください」
　どこから取り出したか、石鹸と柔らかそうなスポンジとを、それぞれ両手に持ったアリエルが、茫然としたままのノエルにそう言った。

　ちゃぷ、ちゃぷ……という、お湯が浴槽にふちに当たる音が、地下牢に響いている。
　ノエルは、たっぷりとした大きさのバスタブに膝立ちになっていた。その背中を、スカートを大きくめくりあげたアリエルが、スポンジで優しくこすっている。
　人に体を洗わせること自体には、王族であるノエルは何の抵抗も感じていない。ただ、それが裏切り者であるハリウスの手の者である上、少なくとも外見はあどけない少女である、ということが、いささか頭を混乱させていた。
　だが、ノエルは大人しく、されるがままになっている。何よりも、ヴァルド・ネロとのおぞましい行為の残滓を洗い清められることは、ありがたかった。
「まだ、ちょっと痕が残ってますね……」
　赤い傷跡を、きつくこすらないように気を付けながら、アリエルはつぶやいた。
　しかし、昨夜――なのかどうか、ノエルには時間の感覚が失われてしまっているのだが――の暴虐の激しさを考えると、その傷は意外なほど少なく、軽い。
　これも、全身に浴びせられたあの忌まわしい体液の効果なのだろうか、と考え、ノエルはぞっと体を震わせた。
　アリエルは、そんなノエルの裸身を包む泡を、お湯で洗い流した。
　ノエルの肌は、処女雪のような白さを保ちながらも、どこか以前とは違っているように見える。
　しっとりとした妖しいぬめりが、その肌に不思議な光沢を与えているのだ。
　無論、ノエル自身は、そんな自らの変化になど、気付いていない。
　が、アリエルは、ノエルの肌を見つめながら、やや吊り気味のその目を、いつしか、ひどく淫蕩に濡らしていた。
「王女サマ……」
　舌足らずな声でそうささやきながら、アリエルは、ノエルの背中の傷跡に、そっと唇を押しつけた。
「ひやっ！」
　幼い少女の予想外の行為に、ノエルが奇妙な悲鳴をあげる。
　構わず、アリエルは長い舌を伸ばし、ぞろりとその赤い筋を舐め上げた。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

「あ……っ？」
　びくん、とノエルの体が小さく痙攣した。
　ネロの触手に鞭打たれ、その後にたっぷりと忌まわしい粘液を染み込まされたその傷跡が、熱く、そして甘く疼いたのである。
「えへ……感じてるんですか？　はしたなァい♪」
　揶揄するように言いながら、アリエルはちろちろとノエルの傷跡を舐め続けた。その上、服が濡れるのも構わず、その小さな両手を前に回し、ノエルの形のいい乳房に重ねる。
「ダ、ダメ……そんな、イタズラしちゃ……！」
　ノエルが、うろたえたような声を出す。しかし、相手があどけない少女であることもあって、なかなか強い態度に出れない。
「ムリしなくてもイイんですよ。……ここでは、ネ」
　アリエルが、ノエルの胸をやわやわと優しく揉みながら、言う。
「あッ……！　お、お止めなさい、そんな……っ！」
　ノエルがそう言っても、アリエルはくすくすと笑うばかりだ。
　そして、アリエルの手が、繊細な指使いでノエルの薄紅色の乳首をつまみ、くりくりと残酷にいじくる。
「あ……ンああ……ふあぁ……ン」
　ノエルは、屈辱に頬を染めながらも、媚びるような声をあげるのを止めることができなかった。
　すでに、甘い疼きは全身に広がり、アリエルにもてあそばれている乳首は、痛いほどに尖っている。しかも、純潔をうしなったばかりのノエルの秘部は、熱く充血し、とろとろと愛液を分泌し始めていた。
　快楽と切なさに胸がざわめき、体の奥深いところが妖しく脈打つ感覚に、ノエルはたまらず身をよじる。
　しかし、アリエルは意外と強い力で、ノエルの体を逃そうとせず、その背中や首筋にキスを繰り返した。
「ンはああアアぁッ！」
　同性の、年端もいかない子どもに愛撫され、股間をいやらしく濡らしてしまうという自らの反応に、ノエルは背徳の快楽をはっきりと感じていた。
（そんな……私のからだは……どうなってしまったの……？）
　たとえ、未だネロの体液の影響下にあるのだとしても、強い意思でそれを跳ね除けなければならない。
　そう思うのだが、アリエルによる淫靡な刺激に、まだかすかに幼さの残るノエルの腰は、ゆらゆらと浅ましく動いてしまうのだ。
　アリエルが、乳房を嬲っていたその右手を、そっとノエルの恥丘に置いた。
「ダ、ダメ……っ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

悲鳴のようなその声に反して、ノエルのクレヴァスは、まるで期待するようにひくひくと震えていた。
その、愛液に濡れそぼった肉の割れ目に、アリエルがそおっと指を伸ばしていく。
ちゅくっ、という、自らの性器がたてる淫猥な音を、ノエルははっきりと聞いた。
「あ、あああああっ……」
「えへへっ……ココ、すっごく濡れてますよぉ」
そんなことを言いながら、アリエルが細い指でノエルの柔らかな花園をくちゅくちゅと優しくかきまわす。
「ああ……んくっ！　ダ、ダメ……や、やめなさい……んうううううっ……！」
そう言いながらも、ノエルは抗うことができない。ただ、へたりこんでしまわないように、バスタブのふちに両手をつき、はァはァと呼吸を早めるばかりである。
「すっごい……王女サマってば……。やっぱ、高貴なヒトの精気は、ちがいますね♪」
右手を、ノエルが分泌する液でびしょびしょに濡らしながら、アリエルが言った。その舌は、しきりに自分の唇を舐めており、そのせいでひどく淫らな表情になっている。
「あ、ああ……もう、もうダメ……私、私もうッ……！」
屈辱と快感に目もとをぽおっと染め、可憐な口からわずかに舌をのぞかせながら、ノエルは切羽詰った声をあげた。
「イクんですね？　王女サマ♪」
アリエルも、興奮に声を上ずらせながら、言う。
「わ、分からない、そんな……イ、イヤ、こんなの、こんなのイヤあっ！」
びくぅ、とノエルの華奢な体が、アリエルの細い腕の中で痙攣した。
「あ、あああ、ああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……ッ！」
絶頂の予感に、ノエルが絶望の色に染まった声をあげる。
「きゃあア！」
と、不意に悲鳴が響き、背後のアリエルの気配が消えた。
「ふわ……？」
イキそこねて、痴呆のような表情を浮かべながら、ノエルは振り向いた。
いつのまにか、閉まっていたはずの扉が、開かれていた。
「あ……！」
そこに、数人の男たちが立っていた。
魔王ヴァルド・ネロと、その背後に立つ、魔道士ハリウス。
そして、ネロのマントの合わせ目から伸びる鎖が、全裸のレオンの首に巻かれた首輪につながっていた。鋲が打たれた、黒い革製の首輪である。
レオンの顔にはいかなる表情もなく、その紫色の瞳はガラス玉のようだ。
アリエルは、空中で逆さまになって、じたばたともがいている。
「つまみ食いの泥棒ネコめ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　どこか面白がっているような口調で、ネロは言った。
「申し訳ありません」
　ハリウスが、ネロに、慇懃ではあるが無表情な声で詫びる。
「躾は、主人の役目だ」
　ネロの赤い瞳が、かすかに光を強めた。
「きゃン！」
　悲鳴をあげるアリエルの小さな体が宙を飛び、ハリウスの足元に、びたん、と音を立てて落っこちる。ハリウスは、まるで猫の子にそうするように、襟首を掴んでアリエルの体を持ち上げた。
「ゴ、ゴメンなさいぃ……」
　情けない声をあげるアリエルを引きずるようにして、ハリウスは立ち去ろうとした。
「この、裏切り者っ！」
　ノエルは、そんなハリウスの背中に、痛烈な言葉を浴びせかけた。
　ちら、とハリウスがノエルに顔を巡らす。
「ハリウス……お前、私はともかく、レオンを裏切ったわね！　レオンは、お前を本当に信頼していたのに……。私、絶対にお前を許さないから！」
　ハリウスは、その仮面のように無表情な顔に、かすかに悲しみに似た表情を浮かべた。
　しかし、そのまま、何も言わず、立ち去ってしまう。
「沐浴は済んだのかな？　王女よ」
　鎖をつながれたレオンを犬のように引きずりながら、ネロがノエルに近付いた。その背後で、音を立てて扉が閉まる。
「お、弟を、レオンをどうしたの!?」
　ノエルは、ネロに向き直り、涙混じりの声で叫ぶように言った。
「遺憾ながら、今の王太子殿下は、魂の抜け殻だ」
　ネロの声には、相変わらず、嘲弄の響きがある。
「アルメキアの王位を継承するには、彼の心はいささか脆弱であったようだな」
「く……」
　ノエルが、悔しげに唇を噛む。
「あの椅子に座っていろ」
　横柄なネロの言葉に、レオンは諾々と従った。寝台に向かい合うような位置にある大きな椅子に無言で座りこむ。
「レオン……」
　自分に対して、ほとんど興味らしい興味を見せない弟の哀れな姿に、ノエルは声を震わせた。
　そんなノエルの裸身に、背後から数本の触手が伸びてくる。
「あ……イ、イヤ、イヤあッ！」

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

はっと気付き、慌ててその戒めから逃れようとするが、もはや手遅れだ。
浴槽の中で膝立ちになっていたノエルの体が、触手によって後手に拘束されてしまう。
その、粘液に濡れながらびくびくと脈打っている感触に、ノエルは忌まわしい記憶を鮮明に思い出していた。
別の触手が、ノエルの白い双乳にくるくると絡みつき、まるでその形と大きさを強調するかのように、乳房を絞り上げる。
「く……」
苦痛の中に混じる甘い快感に、ノエルは思わず声をあげてしまった。
「ヤ……イヤあ……やめ、て……」
そんな言葉とは裏腹に、くすぶっていた官能の火が、ノエルの体内で再び炎をあげようとする。
「イヤあああッ！」
自らの体の浅ましさに、ノエルは触手に戒められながら大きく身をよじった。
「奴隷の身でありながら、主を拒むのか？」
ネロが、ノエルを捕らえている触手に、力を込めた。
「きゃああッ！」
ノエルの体が、あっけなく浴槽から宙に浮いた。触手が、ノエルの体に食い込む。
珠のような水滴を滴らせるノエルの体を、ネロは、石組みの床に下ろした。ちょうど、レオンが座る大きな椅子の正面である。
ノエルは、床に両膝をついてしまった。ちょうど、玉座の前で、配下の礼をとるような格好である。
が、両手を後手で拘束されているため、その姿勢はより屈辱的なものになっていた。
その後に、ネロが体を移動させる。
ノエルは、体をねじるようにして、背後のネロに視線を向けた。そのエメラルドのような瞳には、憎悪と、そしてかすかではあるが隠しようの無い怯えの色がある。
「反抗的な目だ」
ネロは、さも楽しそうに言った。
「まあ、易々と屈服されては、楽しみも少ないが……いつまで続くかな」
ネロの触手が、ノエルの白い肌の上を這いまわり、巧みに性感を煽っていく。
ノエルは、肌を綺麗な薄桃色に上気させながらも、きつく唇を噛み、そのおぞましい快感に耐えようとした。
だが、触手が分泌するぬらつく粘液が、次第にノエルの理性に白い靄をかけていく。
いつしか、ノエルは可憐な唇を半ば開き、はァはァと喘ぐような息を漏らしていた。
体中を、男根に酷似した器官で愛撫され、すえたような性臭を放つ汁に汚されていく。
「く……ン……んくっ……」
触手が、先端に生えた繊毛で乳首を撫で、背中を這うたびに、ノエルは小さく声を漏ら

Neon PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

してしまう。
　もはや、ノエルの秘部はとろとろと透明な愛液を滴らせ、さらなる刺激を待ち望んでいるような風情さえ見せていた。
　しかし、ノエルを嬲る無数の触手は、意地悪く肝心の部分を避け、焦らすようにその周辺を撫で上げるだけだ。
　そんな甘美な拷問のような責めが、延々と続く。
「ンあああああ……あうぅっ……ンはァっ……！」
　とうとう、ノエルははっきりとした喘ぎ声を漏らしながら、目蓋を閉じてしまった。目の端から、透明な涙がこぼれる。
「どうだ？　王女よ」
　ネロが、体の奥底に響くような声で問いかける。
「そろそろ、素直になってはどうだ？」
「な……なんですって……？」
「自らの求めてるものを、我にねだるがいい……奴隷の身とは言え、遠慮はいらぬぞ」
　ネロの声は、圧倒的な優位を確信している様子である。
「あ……ンうううううううっ……！　くうン……はあッ……！」
　いっそう激しく自らを撫でまわし、汚穢な粘液を塗りつける触手の動きに、ノエルは小さな両手を握り締めた。その肉の花弁は蜜を溢れさせながら、物欲しげにひくついている。
　しかし、ノエルは、残る理性を必死でかき集め、言った。
「イ、イヤ、よ……だれが、おまえなんかを……」
　辛そうな息の合間に、はっきりと、拒絶の言葉を告げる。
　まるで、その言葉に怒りを覚えたかのように、一本の触手がノエルの豪奢な金髪に絡みついた。
「ああああああッ！」
　そのまま、ぐい、と背後に引っ張り、ノエルの顔をのけぞらせる。
　思わず、ノエルは目を開いていた。
　目の前に、石造りの椅子に腰掛け、首輪をはめられた全裸のレオンがいる。
「あぁ……」
　ノエルは、思わず声を漏らしていた。
　レオンの顔に、わずかに表情が戻っている。
　姉の痴態に興奮しているのか、その頬にはわずかに赤みが差し、空ろだった紫色の瞳は、どこか涙で潤んでいるようだ。
　その、少女のような顔に、まぎれもない、欲情の色が見える。
　ノエルは、一瞬、まるで鏡を見ているような錯覚にとらわれた。
「ア……っ！」
　ノエルの中で、細く張り詰めていた糸が、ついに切れた。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「あ、ああ、あああっ？　ンあああ、あ、あァ、ああああアアアアアアアアっ！」
　自らの内に爆発的に高まる性感に、うろたえたような高い声をあげる。
　ぞくぞくぞくっ、とノエルの背中が震えた。
「欲しいか？」
　ネロが、短い言葉で訊く。
　ノエルは、再び背後のネロに顔を向けた。
　その、ぞくりとするような流し目が、欲情に濡れている。
「あ……あァ……わ、わたし……わたし……」
　ノエルの瞳に、彼女の純潔を奪った、青黒いネロの器官が映る。
「欲しいか？」
　再び、ネロが訊く。
「う……」
　ノエルは、童女のように頼りなく、こっくりと肯いてしまった。
「クックックックックッ……」
　ネロが、ある種の鳥を思わせるような声で、嗤う。
「尻を上げろ、ノエル」
　聖王女としての誇りをずたずたにするような屈辱的な命令に、ノエルは、体を小刻みに震わせながらも、従った。
　目から、涙が溢れる。
　しかし、恥辱が、なぜか胸を熱くざわめかせるのだ。
　ネロの熱い男根が、高々と上げられたノエルのお尻の谷間を、ぞろりと撫で上げた。
「ひッ……！」
　たったそれだけの刺激で、ノエルはびくンと体を痙攣させてしまう。
　その青黒い触手は、自らをノエルの肉襞の間に浅く潜りこませ、細かく動いた。自らの恥ずかしい部分がたてる、くちゅくちゅという卑猥な音が、左の頬を床に押し当てるような屈辱的な姿勢をとるノエルの頭を狂わせる。
「ひあ……ああァン……あ……はァ……あああァん……」
　ノエルは、悩ましげな声をあげながら、ゆらゆらとその可愛いお尻をゆすった。
「欲しいのだな、ノエル王女」
「……ほ……ほしい……ほしい、です……」
　確認するネロに、ノエルは熱に浮かされたような声で答える。
　ずるり、とネロのペニスがノエルの中に侵入した。
「はッ……ンはあああああアアア……はああァ……っ！」
　熱く濡れる肉の花びらを掻き分け、まだ狭い膣内の粘膜をこすりながら、長大な触手がノエルを犯していく。
「あ、ああああああ、ンああ……はあああああああ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その、処女を失ったばかりの少女には太すぎる触手が、ノエルから細い悲鳴を押し出す。
が、その声は、まぎれもない快美感に甘く濡れていた。
ネロの器官は、その表面から奇怪な粘液を分泌し、靡粘膜でそれを吸収したノエルの体に、火のような熱さが満ちていく。
体の最深部にある、痛みを伴う圧倒的な存在感に、ノエルはわずかに残っていた理性をなくしていった。
「あああッ？」
ネロが、抽送を始めた。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
節くれだったネロのペニスが、ノエルの小さな秘部を出入りする。そのたびに、赤い靡肉はめくれあがり、大量の体液が床に滴った。
じゅぼじゅぼという、信じられないほどに淫猥な音が、つい数日前までは自らの指しか知らなかったその部分から湧き起こる。
「ア……んうううううっ！　ンああ、あ、あ、あふ……ふあぁ〜ン……」
両手を後手に戒められ、犬よりも屈辱的な姿勢で床に這いながら、ノエルは甘い喘ぎ声をあげていた。
自身の涙と涎で、秀麗な顔を汚しながら、ノエルは恍惚の表情を浮かべている。
レオンが、その姉の姿を、かすかに光の戻った紫色の瞳で、じっと見つめていた。
「あああああああーッ！」
ネロの男根が、いっそう激しく膣内をえぐり、ノエルは戒められたままの体を大きく震わせた。
ノエルの全身にからみつく触手たちまでが、非人間的な情動をあらわにしながら、ずりずりとノエルの白い肌に自らをこすりつける。
「あッ！　あッ！　あッ！　あッ！　あッ！　あああああああああぁアーッ！」
ノエルが、悲痛な歓喜の声をあげた。
一斉に、ネロのマントの奥から伸びる触手たちが、びくびくと律動する。
そして、その先端から、おびただしい量の白濁液が放たれた。
びしゃっ！　びしゃっ！　と音をたてるほど強く、粘つく液体がノエルの体を叩く。
今や、その感触も、精液そのままの青臭い匂いも、ノエルの頭を官能に痺れさせるものでしかなかった。
最後に、ノエルの体内奥深くまで差し込まれたネロのペニスが、大量の精をノエルの子宮めがけ発射した。
「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァーッ！」
一際高い声が、地下牢の空気をいつまでも震わせた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

アルメキア聖王国宮廷。
その一室の、淀んだ空気の下で、王国の重鎮たちは会議を繰り返していた。
最も高貴な者が座るはずの席には、誰もいない。国王ナンテスⅠ世は療養中であり、彼に代わってその座についていた王太子は、宿敵であるネルドール魔王国によって、その姉ともども拉致されている。
しかも、その手引きをしたのが、他でもない王太子の養育係であった宮廷魔道士なのだ。
大臣や将軍たちの顔には、疲労の色が濃い。
その中で、唯一、狂おしいほどに活力に満ちているのが、ダニル将軍だった。
「何度も言うように」
ダニルは、机を叩かんばかりの勢いで、言っていた。
「出征は、早ければ早いほどいい。一日送れれば、その分、ネルドールは力を蓄えてしまうのだ」
「将軍」
このところ、めっきり老け込んだ宰相のユーリック公が、物憂げに口を開いた。
「なんです？」
「将軍は毎朝、何を召し上がっておいでかな」
「は……？」
アルメキア最大の貴族の言葉に、ダニルは少なからずとまどった様子だった。
「健啖家である将軍なれば、一つや二つのパンでは足りぬであろう」
「はあ……」
「兵士たちも、そうだ。勇壮なる我が騎士団や義勇兵たちも、三度三度、パンと、少なくとも豆のスープと、時には干し肉や火酒を、口にせねばならん」
「……」
ダニルは、宰相が言いたいことを悟り、苦い顔をした。
「後方からの補給無しでは、戦はできん。将軍ともあろう者が、それを忘れているわけではあるまい」
「しかし……」
「今、各地から徴している兵糧が集まるまで、どれくらいかかる？」
「出兵を行う最低限の量が集まるまで……ざっと一週間です」
ユーリック公に尋ねられた彼の補佐官が、あくまで事務的に答える。
「話にならん！」
ダニルは、勢いよく椅子を蹴り、立ち上がった。木製とはいえ、充分に頑丈に作ってあったはずの椅子が、石の柱にあたって形を歪める。
「私は、たとえ一人でも行く！」
「子供のようなことを言うな、ダニル！」

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　つられて、ユーリック公も大声を出してしまった。
「山に巣食う竜を狩りにいくのとは、訳が違うのだぞ！」
「……ならば、私の直属の騎士達を率いて、先行する」
　ダニルは、その褐色の瞳に強い光を宿しながら、並み居る文官、武官を睨み渡した。
「それなら、文句ないでしょう」
「……外征には、国王の許可が要る」
　議長役の老貴族の言葉に、ダニルは太い眉を怒らせた。
「ならば、今から許しを戴いてくる！　御免！」
　ダニルは、そう言い捨て、大股で部屋を出ていった。

　ノエルは、ランプの灯が絞られた地下牢の中で、寝台の上にぼんやりと座っていた。
　その首に、レオンがしているのと同じ、鋲を打った革製の首輪がかけられている。
　その首輪からは鎖が下がり、そして、その鎖は、同じように寝台に腰掛けてるレオンの首輪につながれていた。
「レオン……？」
　時々、思い出したように、同じ鎖でつながってる双子の弟に、ノエルは声をかける。
　そのたびに、レオンは、並んで座ってる姉の方にわずかに首を巡らせるのだ。
　そして、姉の顔を認めると、かすかな――ノエルでなければ認めることすらできないようなかすかな微笑みを、その少女のような顔に浮かべるのである。
　透明な、哀しい微笑みだ。
　ノエルは、そんな弟の哀しい笑みによって、辛うじて理性と矜持を保つのである。

　外の夜空に昇る、白々とした満月を仰ぐこともなく、姉と弟は闇の底に沈んでいた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第五章

　アリエルは、その小さな体にきつく縄がけされた姿で、天井から吊るされていた。
　その爪先が、辛うじて石組みの床に届くかどうかという格好である。細めの麻縄が、薄い胸の上下に無残に食い込んでいる。
　アリエルは、全身に細かく汗の玉を浮かせ、はぁはぁと辛そうに喘いでいた。
　その目の前に、最近、ますます顔の鋭さを増したハリウスが佇んでいる。
　ネルドール魔王国の王都ヴァルディアの中央部、ヴァルド・ネロの居城の中にある、魔道士の塔の地下室である。
　レオンとノエルを拉致し、ネルドールに転向して以来、ハリウスはネルドールの宮廷魔道士の長として、この魔道士の塔の支配者となっていた。かつて、厳しく自らに課していた禁忌を捨て去った今、ハリウスの魔力に比肩する魔道士は、ここネルドールにすら存在しなかったのである。無論、ネロを除いてではあるが。
　この地下室は、今、ハリウスの完全に私的な実験室として使われている。壁際の棚には様々な魔道の法具が置かれ、部屋の空気は妖しげな魔薬の刺激臭に満ちている。
「ごしゅじんさま……おねがい、許してェ……」
　アリエルの哀れな声が、その部屋の中にか細げに響く。
　しかし、ハリウスはそれに答えず、どこか陶器じみた無表情な顔のまま、ぶつぶつと何か呪文のようなものを呟いた。
　その呼びかけに応じ、部屋の片隅に置かれた木製の桶の中から、ずるりと何かが這い出てくる。
「ひやッ……！」
　アリエルが、幼い少女そのままの悲鳴をあげる。
　それは、汚らしい緑色の、半透明の粘液の塊だった。それが、ハリウスの言葉に導かれるまま、その体をゼリーのように震わせ、ずりずりと床を這い進む。
「ヤ、ヤダよう……そんな……ス、スライムなんかけしかけちゃイヤあッ！」
　アリエルが、空しく身をよじりながら、声をあげる。しかし、ハリウスの魔力が込められた縄で戒められたアリエルは、変身することも、魔法を使うこともできない。
　今やアリエルは、見かけ通りの、年端もいかない哀れな少女でしかなかった。
　そのアリエルの足元に、小さな桶を一杯にするほどの粘液状の下等生物――スライムが、ぶるぶると震えながらうずくまる。その原形質の体の中には、細かな水泡や、未だ消化しきれていない様々な断片があるだけで、生物としての最低限の知性すらうかがえない。
　スライムは、のろのろとその体から何本もの偽足を伸ばし、アリエルの華奢な両足にまとわりついた。
「ヤダあーっ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　生きた粘液の、意外と温かなおぞましい感触に、アリエルが悲鳴をあげる。
「イ、イヤ、イヤ、イヤ、イヤあ！　ご主人様、やめてよう……アリエル、いいコになるからあッ！」
　まるで童女そのままのアリエルの台詞に、ハリウスはわずかに苦笑に似た表情を浮かべた。
「悪魔のくせに、いい子になるもないもんだ」
　そんな呟きも、アリエルの耳には届かない。
「あ、ヤダっ！　ヤダヤダヤダあ！　あああーッ！」
　スライムは、次々と細長い偽足を伸ばしては、その吸盤上の先端をアリエルの白い肌に吸い付かせ、自らの体を上へ上へと運んでいく。
　そして、おぞましい粘液の怪物は、とうとう目的の場所にまで達した。
「キャアアアアアアアアアー！」
　ぬるり、とスライムの一部がアヌスに触れたその感触に、アリエルは絶叫した。
　しかし、スライムには、そんな悲鳴に反応するだけの知性などない。ただ、ハリウスの簡単な命令と、そして盲目的な本能にしたがって、その体を、柔らかく温かい肉の穴の中に入り込ませるだけだ。
「あ、ああああ、あ、ンアアああああ……ッ！」
　アリエルが、目を見開き、口をあけながら、がくがくと体を震わせる。
　その本性が堕天使であるとはいえ、今のアリエルの肉体を構成しているものは、人間の少女と何ら変わりはない。そんなアリエルの腸内に、信じられないほど大量の蠢く粘液が、ずるずるとその体を侵入させていく。
「く、くるし……しん、じゃう、よう……」
　涙と涎で幼い顔をべとべとに汚しながら、アリエルがようやくそれだけ言う。
　だがスライムは、まだその体の半分をアリエルの体内に収めたのみである。
「せっかくだから、その腹の中をすっかり綺麗にしてもらえ」
「ア……やァ……ゆ、る、し、てぇ……」
　ハリウスの冷たい言葉に、アリエルは弱々しくかぶりを振る。
　しかし、スライムは容赦なく、アリエルの腸内への侵入を続けた。
　その白いすべすべのお腹はぷっくりとふくれだし、どこか蛙を連想させる。
「ひ、ああ……あ……あああー……」
　スライムが、自らの体内に浸透し、腸内の内容物をこそげとるようにして取り込んでいく重苦しい苦痛に、アリエルは痴呆じみた声をあげる。
　幼くして死んだ、肉親の情以上の想いを以って愛した妹と同じ顔が、のけぞるようにして天を仰ぎながら、かすかな悲鳴と大量の涎を噴きこぼす。そんな様子を、ハリウスは相変わらずの無表情で見つめていた。
　が、その暗い双眸の奥には、どす黒い愉悦の色が、かすかにうかがえる。それは、魔と

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

闇に魂を売り渡した者特有の顔だった。
　今や、アリエルの腹部はまるで妊婦のように膨れあがり、はちきれんばかりになっている。もし針の先でつついたら、それだけで破裂してしまいそうな様子である。
「ァ……ァ……ァ……」
　ごぼっ！
　一杯に開かれた小さな口から、胃液が逆流する。
　もはや限界と見て、ハリウスは小さく印を切った。
「あ、あああああああッ！　あ、あ、あ、あアアアーッ！」
　アリエルが、どこにそんな力が残っていたのかと思われるような、凄まじい絶叫をあげる。
　アリエルの腸の中を思う様に蹂躙していたスライムが、一気に全身を弛緩させたのだ。
　異様な破裂音をあげて、アリエルは、凄まじい量の緑色の粘液を排泄した。
　その細い両足の間を、汚穢な粘液を飛び散らせながら、スライムがぼとぼとと流れ落ちる。が、その体は途中で千切れることが無いため、アリエルは排泄を休むことができない。
「ひあああー！　ああ！　あ！　わあああああッ！　あ、いあ、あッ、アアアあああー！」
　強制的にその可憐な菊門を開きっぱなしにさせられながら、敏感になった直腸粘膜を連続してずるずるとこすられるおぞましい感触。
　アリエルは、その緊縛された幼い体で、陸に上げられた魚のようにのたうった。
　括約筋を弛緩させ、だらしなく失禁しながら、アリエルは、かつてないほどの肛虐に、涙を溢れさせている。
　そして……十数分にも及ぼうかという長い長い拷問そのままの排泄が、ようやく終わった。
　まるで肉でできた人形のように、ぐったりと吊るされたアリエルの足元で、飽食しきった様子のスライムが、満足げにぶるぶると震えている。が、ハリウスがそちらに目をやると、スライムは、まるでその視線に触れるのを恐れるかのように、驚くほどに素早く動き、再び部屋の隅の桶の中に身を隠した。
　ハリウスは再びアリエルに視線を戻し、その黒髪をつかんで、ぐい、と顔を起こした。
「……」
　アリエルは、悲鳴をあげるどころか、声を出すこともできない様子である。そのあどけない顔は、汗と涙と涎、さらには鼻水や吐瀉物でどろどろに汚れ、無残と言うのも愚かしい状態だ。
　しかし、その顔には、かすかにではあるが、どこか恍惚とした表情が見て取れる。
　ハリウスは、懐から柔らかな布を取りだし、アリエルの顔を乱暴にごしごしとぬぐった。
「ン……んぷ……んぐぅ……」
　息が苦しいのか、アリエルがかすかな呻き声を上げる。
　ハリウスがふくのを止めると、アリエルは、あれほどの苦痛を自らに与えたその男に、

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

とろけそうなほどの隷従の視線を向けていた。
「思い知ったか？　アリエル」
　髪をつかんで、その頭をぐらぐらとゆすりながら、ハリウスが訊いた。
「ふぁい……ごひゅじん、さまぁ……」
　アリエルは、聞き取れないほどの細い声で、答える。
　ハリウスは、ゆったりとした布のズボンを下ろし、固く反り返った剛直をあらわにすると、アリエルの両足首をつかんで、高く持ち上げた。アリエルの薄い胸の上下にかけられた縄が、きりきりとその体に食い込む。
「あ、ああッ、あ〜ン……」
　だが、アリエルは、明らかに欲情に濡れた声をあげていた。
　もはや、苦痛がそのまま快感に変わってしまっているらしい。
　その無毛の秘所は、失禁の名残やスライムの粘液とは異なる、透明な愛液にねっとりと潤んでいた。
　ハリウスは、アリエルの両足をＶの字に開いた状態で、めくれあがった鮮紅色の柔らかな靡肉の感触を楽しむかのように、自らの男根の裏側をそこに意地悪くこすりつける。
「ひあン……ご、ごしゅじんさま……じらさ、ない、でェ……」
　アリエルが、弱々しく訴える。
　ハリウスは、その赤黒い亀頭を、アリエルの柔らかな肉襞の合間に潜り込ませた。
　そのまま、ゆっくりと腰を進める。
「は……ぁぁぁ……ンぁあァァァ……」
　アリエルは、どこか壊れたような恍惚の表情で、自らの器官にハリウスの剛直が侵入していくのを見つめていた。
「ンくッ……」
　先端が、アリエルの未成熟な子宮口に届いた。ずん、と響くような強い快感に、アリエルは力の抜けた体をがくンと揺らす。
　ハリウスは、膣内の粘膜の感触をペニス全体で味わうように、しばらく動きを止めた後、ゆっくりと抽送をはじめた。
「ひは……ンわァ……ア……アアァ……」
　アリエルは、だらしなく開いた口から涎をこぼし、ハリウスに体をゆすられるまま、空ろな視線を宙にさ迷わせた。
　が、その靡肉は、まるでハリウスを離すまいとするかのように、その竿の部分にしっかりと絡みつき、きゅんきゅんとペニス全体をけなげに締め上げている。
「いい具合だ、アリエル……」
　アリエルの、やや尖った耳に口を寄せ、ハリウスが言う。
「う、うれしいよう……ごしゅじん、さまァ……」
　そう言うアリエルの顔を、ハリウスの、どこか怪物じみた異様に長い舌が、ぞろりと舐

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

め上げた。
　アリエルが、震える舌を精一杯伸ばして、そんなハリウスの舌を捕らえようとする。
　尖った犬歯をわずかにのぞかせたハリウスの口と、ピンク色の小さなアリエルの唇が、ぴったりと重なった。
　二人は、二つの接合部から体液を滴らせ、粘膜同士がこすれる淫猥な音を地下室に響かせる。
　ハリウスが、唾液の糸を引きながら、顔を離した。
「どうだ？　コレなしで生きていけるか？」
　ハリウスが、そんなことを言いながら、ますます深くアリエルの秘部をえぐる。
「ダメぇ……ア、アリエル、ごしゅじんさまなしじゃ……いきてけないよう……」
　ふるふるとかぶりを振りながら、アリエルが情けない声をあげた。
「ならば、もう浮気はするなよ」
　苦笑いに似た表情をその鋭い顔に浮かべながら、ハリウスが言う。
「し、しない、しないよう……っ……ひあ……アリエル、ご、ごしゅじんさまのが……いちばん、すきィ……」
「ご褒美だ」
　ハリウスは、ますますその腰の動きを速めた。
「ひあ！　はあああああ！　ンあ！　あっ！　あっ！　あっ！」
　じゅぶじゅぶという音とともに愛液がしぶき、アリエルの粘膜が痛々しいほどにめくれあがる。
「あ！　あはァ！　ンわあああああああああああああああああああああああああああああッ！」
　アリエルは、最後の力を振り絞るようにして高い声をあげ、ぴん、と体を硬直させた。
「……ッ！」
　ハリウスが、声にならないうめきを上げながら、一際強く腰を突き上げる。
「はぁッ！」
　体の一番深いところで、熱い精気に満ちたスペルマが弾ける感覚に、アリエルは肺に残っていた最後の空気を吐き出した。
　どくっ、どくっ、どくっ……！　と力強く脈打ちながら、ハリウスのペニスがアリエルの体内に、大量の白濁液を注ぎ込む。
　そして、アリエルの膣壁は、その生命のエキスを一滴もこぼすまいとするかのように、貪欲に蠕動するのだった。
「あ……あああ……はぁアー……っ……」
　熱くたぎるような精気が全身に行き渡る感じに、アリエルが安堵したような歓喜の声をあげる。
　そして、アリエルはうっとりとした表情のまま、失神してしまった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　しばらくして、ハリウスは、アリエルを戒める縄を解き、その柔らかな頬をぴたぴたと叩いた。
「ふえ……？」
「起きろ、アリエル」
　呆けたようなアリエルの顔を覗きこみながら、ハリウスが言う。
「アルメキアで、もうひと働きだ。出兵をしぶるナンテスⅠ世の頭をいじくる……。あの方のために、な」
　そう言いながら立つリウスの傍らに、アリエルもよろよろと並んで立ちあがった。

「レオン……」
　地下牢の寝台の上で、ノエルはレオンに話しかけていた。
　レオンの理性が戻る様子は一向にない。しかし、ノエルは、答えを返すでもないレオンに向かって、様々なことを話しかけていた。
　若くして死んだ美しい母親のこと。強く、厳しく、聡明な父王のこと。忠実な家臣たち一人一人に関する挿話。そして、宮廷での典雅な生活の想い出など……。
　自分が、いかに恵まれた生活をしていたのか。憎むべき仇敵に拉致され、悪夢のような辱めにさらされた今、それが痛いほどに感じられる。
　レオンは、鎖でつながれた姉の話の内容を理解できない顔のまま、それでも耳を傾けている様子だった。
「憶えてる？　レオン……あの、狩りの日のこと」
「……」
　レオンが、少女じみた顔を小さくかしげる。
「十二歳になる前の秋、だったよね……」
　ノエルは、その美しい緑色の瞳に、懐かしげな光を浮かべた。
「レオンは、生き物を殺すなんてイヤだって、弓も矢も持たずに、狩場に出て……。一方あたしは、天幕を抜け出しちゃって……」
「……」
「森の中でお花畑を見つけて、はしゃぎまわってたあたしの前に、おっきなイノシシが現れて……」
「……」
「あのとき、すごく怖かった。それを、レオン、あなたが助けてくれたのよね……」
　その時レオンは、ほとんど丸腰のまま、姉に突進するイノシシの前に踊り出たのだ。
　そして、イノシシの牙の一撃を受けながら、覚えたての目くらましの呪文を使い、イノシシを退散させたのである。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

が、その時の傷が原因で、レオンは高熱を発し、その後も病気がちになってしまった。
「あたし、あなたにきちんと謝って……それから、お礼、言わなきゃって……」
その後は、言葉にならなかった。
ノエルの大きな目から、ぽたぽたと熱い涙が零れ落ちる。
レオンは、そんな姉の様子を、不思議そうな顔で覗きこんだ。
ノエルが、そんなレオンに、無理に微笑んで見せる。
と、その時……地下牢の重い扉が、錆びついた音をたてながら開いた。
「！」
はっ、とノエルが顔を上げた。
扉の前に、魔王ヴァルド・ネロが佇んでいる。
ノエルは、体が細かく震えるのを抑えることができないまま、その両手で剥き出しの乳房を隠した。
ネロが、瞳を赤く光らせながら、捕われの双子に近付いてくる。
「よ、寄らないで……ッ！」
ノエルは、悲鳴のような高い声で叫んだ。
「やめて……もう、やめて！　もう、充分辱めたでしょ！　あたしたちを、あたしたちを帰して！　帰してよお……っ！」
聖王女としての誇りをかなぐり捨てたような泣き声混じりのその声に、いささかも心を動かされた様子もなく、ネロは、ノエルとレオンをつなぐ鎖に左腕を伸ばした。
そう、それは、人間の腕だった。あの、マントの中にあった触手の集積とは違う。が、その表面はどことなくぬめぬめとした光沢をはなっており、今にもおぞましい触手に変わってしまいそうだ。
その腕が、鎖を握り、ぐい、と引き寄せた。鎖につながった、鋲を打たれた革の首輪が、ノエルの細い首に無残に食い込む。
たまらず、ノエルは寝台から立ち上がった。レオンも同様である。
「うぅ……」
ノエルが、悔しげな呻き声を弱々しく上げる。
「たまには、外を散歩をさせてやるぞ」
「イ、イヤ……イヤよ……」
ノエルが、ふるふるとかぶりを振る。
「お前が選択すべきときはとうに過ぎたのだ、王女よ」
ネロは、どこか面白がっているような口調で言った。
「お前は我が奴隷になることを選んだ。奴隷が主人に逆らうことは許されまい？」
そう言いながら、左手で鎖を握ったまま、右腕をノエルの股間に伸ばす。
「ああッ？」
得体の知れない粘液に濡れたネロの右手の指が、ノエルのクレヴァスに食い込んだ。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「や、ヤああ……あああッ！」
　ノエルは、その細い腕で、必死にネロの体を押しのけようとする。しかし、ネロの巨体はびくともしない。
「ふあっ！」
　ノエルの体から、いっぺんに力が抜けた。
　ネロの右手の指が、深々とノエルの秘部をえぐったのだ。
　いや、それはもはや指ではなかった。うねうねとうごめく触手と化したネロの一部が、ノエルの体内に、あのおぞましい媚薬効果をもつ粘液を分泌しながら、侵入しつつあるのである。
「あ、あああ……い、やあァ……ア……ンうううううっ……」
　ノエルが、はっきりとした快感に長い脚を震わせながら、切ない喘ぎ声を上げる。
　ネロが、右腕を引いた。
　しかし、触手はノエルの体内に残ったままだ。触手は、ネロの体から分離し、ノエルのまだ経験の浅い膣内で、蛇のようなその体を蠢かせている。
「あぁあ……はあぅ……ン」
　ノエルは、蜜壷から湧き起こる感覚にその体を支えきれず、四つん這いになってしまった。
　無意識に、その白く丸いヒップが、ゆらゆらと動いてしまう。
　まだ幼さを残しながらも、淫猥にめくれあがり、とろとろと透明な愛液をあふれさせているその膣口からは、ピンク色の触手が、尻尾をわずかにのぞかせ、くねくねといやらしく動かしていた。
　ノエルの横で、レオンも、首輪につながった鎖に引かれ、両手と両膝を床についている。
　しかし、おぞましい快美感に、半ば虜となったノエルは、そのことにすら気付いていない様子だ。
「行くぞ」
　ノエルとレオンの首輪をつなぐ鎖のほぼ中央に、別の鎖を金具でつなぎ、Ｙの字の形にした後、ネロは歩き出した。
「あああッ……」
　絶望的な悲鳴をあげながらも、ノエルは、それについていく。
　アルメキア聖王国の王女と王子は、犬のように、四つん這いで鎖に引かれ、地下牢の扉をくぐるのだった。

　外の空気は、生暖かかった。
　まるでねっとりとからみつくような風が、ノエルの美しい裸体をなぶる。
　しかし、それ以上に忌まわしいものが、ノエルの白く美しい肌を犯し、汚していた。
　それは、群集のざわめきと視線だった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　城門から出たネロと、そのネロに鎖をつながれて引かれる美しい王女と王子を、表通りの脇に集まったヴァルディアの街の民衆たちが見つめているのだ。
「ぁぁぁ……」
　これまで考えたこともなかったような屈辱と羞恥に、ノエルが細い声をあげる。
　ヴァルディア市民達は、一様に汚らしい服をまとい、下卑た表情を浮かべながら、全裸のノエルとレオンに粘つくような視線を送っていた。
　そして、ネロと、その周囲を固める無表情な衛士を恐れながらも、家畜のように這いつくばる美しい双子に、そろそろと近付いていく。
　ヴァルディアの大通りは舗装されておらず、ひどく埃っぽかった。乾いた土に四肢を汚しながら、ノエルとレオンは、その惨めな姿を人々にさらしていく。
「ぅ……ンぅぅッ……くぅっ……」
　まるで全身の血が逆流するような汚辱に、ノエルはたまらず嗚咽を漏らしていた。しかし、その泣き声は、どこか媚を含んだように、淫らに濡れている。
「見ろよ、あの顔をよ……」
「ああ。ネロ陛下のを咥えこんで、ヨガってやがる」
「へへえ、聖王女サマったって、きちんと濡れンだなあ。大洪水だぜ」
　以前の彼女であれば、下賤の者として目にするのも汚らわしいと感じたであろう無法者たちのささやきが、ノエルの肺腑をえぐる。
　淫猥な責めによって敏感になったノエルの靡粘膜は、男たちの視線を感じ、ちりちりと火であぶられるような感覚を覚えていた。そして、ネロの触手が分泌する体液は、そんな刺激さえも快楽に変え、ますますノエルの肌を上気させるのである。
　二人を視姦しているのは、人間だけではなかった。
　ずんぐりとした体躯と豚そっくりの顔をしたオーク鬼や、どす黒い体全体にカビを生やした犬面のグール族、女の顔と乳房を備えた人面鳥ハルピュイアたち……。
　それら異形の種族たちまでが、おぞましい欲情に濡れた目を、自分達に向けている。
　ノエルは、屈辱と羞恥と恐怖、そして体の奥からこみあげてくる快感に、頭の中が真っ白になった。
　男たちのすえたような体臭や、荒い息遣いまでもが、ノエルの細い体を責めさいなむ。
「ぶごおおおおおおっ」
　突然、何事かわめきながら、オークの一人が、醜悪な牡器官を取り出した。
「ひイッ……！」
　犯される、と思い、ノエルは悲鳴をあげた。
　が、オークはそこまで命知らずではなかった。ネロの所有物に手を出そうものなら、その魔力によって、骨も残さず蒸発させられてしまう。
　そのオークは、ノエルのその部分をにらみつけながら、猛烈な勢いで手淫を始めた。
「イ、イヤっ！」

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

　目の前で展開される忌まわしい行為に、かすかに残っていたノエルの理性が嫌悪の声をあげる。
　が、まるでその言葉をきっかけにしたかのように、何人もの男たちが、ノエルに群がってきた。そして、競うようにズボンを下ろし、すでに反り返ったペニスを激しく自ら慰める。
　ネロは、その様子をまるで面白がっているかのように、赤い瞳を光らせながら、足を止めていた。
「イヤ、イヤあああああ！　やめてえッ！」
　ノエルは怯える小動物のように、道の上で体を丸める。
「あああアアアーっ！」
　が、次の瞬間、ノエルはひときわ高い声をあげて、上半身を起こしてしまった。
　膣内に埋め込まれたネロの触手が、何倍もの大きさに膨れ上がり、狂ったように暴れだしたのである。
「ダ、ダメ！　ダメえ！　ンああ！　ひあああああああああああああああああッ！」
　衆人環視の中、強制的に絶頂へと押し上げられ、ノエルは背中を反らして激しく痙攣した。
　獣じみたわめき声とともに放たれた不潔な白濁液が、そのおののく体に浴びせられる。
「ンわあああああッ！」
　その美しい顔に付着した粘つく体液の意外なほどの熱さに、ノエルが悲鳴をあげる。
　そんなノエルの体に、次々と淫臭を放つ精液が発射される。
　たちまち、ノエルの体は、牡臭い粘液にまみれ、どろどろになってしまう。
「アッ！　アッ！　アッ！　アッ！　キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーッ！」
　熱気と、熱い視線と、熱い体液とに包まれ、立て続けに絶頂を迎えるノエルの悲痛な叫びが、ヴァルディアの空高くまで響いた。

「ダニルよ……」
　病床の中、アルメキア聖王ナンテスⅠ世は、苦渋に満ちた声で言った。
「お前の気持は、一人の父親として、有り難く思う。しかし……」
「陛下！」
「しかし、出兵を許可することはできん」
　その言葉に、寝台の傍らに立つダニルの顔が、大きく歪む。
　ナンテスⅠ世の療養のための離宮の、一番奥の　一室である。天井の高いその部屋には、ダニルとナンテスⅠ世以外、人払いされている。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　寝台に力なく横たわり、大量のクッションで辛うじて上体を支えているナンテスⅠ世は、痩せ衰え、無残なほどに憔悴していた。
　ただ、その目に宿る光だけが、かつての英雄王の威厳をわずかにうかがわせる。
「冒険的な出征のために、民草を無駄に死なせるわけにはいかん。……お前の、ノエルを案じる気持は嬉しい。しかし、情に溺れて大局を見失うわけにはいかんのだ」
「私が、情に溺れているとおっしゃるか？」
「……」
　沈黙が、ダニルの問いに答える。
　ダニルの褐色の双眸に、危険な色が浮かんだ。
「陛下……」
　ダニルが、歯を強く食いしばりながら、寝台に近付いていく。
「あなたは、この国にはもう用済みのお方だ」
「ダニルっ……！」
　ダニルの言葉よりその表情に危険を感じ、ナンテスⅠ世は呼び鈴に手を伸ばした。
　が、衰えた王の手よりも数段早く、ダニルの逞しい両腕が走る。
　ダニルの両手が、ナンテスⅠ世の頭の両脇のクッションをつかみ、強く王の顔に押しつけた。
「……ッ！」
　王の、枯れ枝のような両腕が、空しくダニルの体を押しのけようともがく。
　が、次第にその力は弱まっていった。
　ナンテスⅠ世の腕の動きが、止まった。
　二人は、まるで石と化してしまったかのように、ぴくりとも動かない。
　そして……かつて英雄王とまで称えられたナンテスⅠ世の両腕が、がっくりと毛布の上に落ちた。
　それでもダニルはしばらくの間、アルメキアの聖王を黄泉路に送ったその手を、緩めようとはしなかった。
　その精悍な顔に、ノエルが見たら思わず顔を背けそうな、悪鬼のような笑みが浮かんでいる。
「……順番が、狂っただけのことだ……」
　ダニルは、その顔のまま、低く呟いた。
「アルメキアは、私がいただく……」
「ダニル！」
　と、その背後から、聞き覚えのある声が響いた。
「ダニル、お前は……！」
　ダニルが振り返ると、そこに、青いローブ姿の魔道士ハリウスと、そしてアリエルがいた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ハリウスの、東方系の顔が、複雑な表情を浮かべている。
「ハリウスっ！」
ダニルが、腰の大剣を鞘走らせながら、大理石の床を蹴る。
裂帛の気合を込めて、ダニルがハリウスの頭部めがけて大剣を薙いだ。
「ご主人様ッ！」
アリエルが、高い声で悲鳴をあげる。避けることも、呪文を唱えることも間に合わない。
鋼が肉と骨を断つ鈍い音が、響いた。
どっ、と音をたてて、かつてハリウスの一部であったものが、床に落ちる。
それは、ハリウスの左腕だった。
ハリウスは、致命的な一撃を、左手を犠牲にすることによって受け流したのだ。
「ダニル……やはり、あの方のおっしゃった通りか……」
傷口から鮮血をしぶかせながら、しかしハリウスは憐れむような視線を、ダニルに投げかけていた。
そして、呪文を完成させ、部屋の空気に溶けこむように、すうっと姿を消す。
「待てッ！」
ダニルが、狂乱したような声で、喚いた。
しかし、すでに部屋からは、ハリウスも、そしてアリエルの姿も消えてしまっている。
「……侵入者だ！」
しばしの逡巡の後、ダニルは大声で叫んでいた。
「ネルドールの間者に、聖王陛下が害されたぞ！」
冷たい石でできた離宮の中、弑逆者の太い声が、どこか虚ろに響いた。

翌日、ダニルは配下の騎士団や義勇兵を率い、ネルドール魔王国への出兵を開始した。
世に言う、第四次聖魔戦役の勃発である。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第六章

　アルメキアの騎士達は、勇敢な義勇兵を率いてよく戦った。
　兵達にとって、これは聖王ナンテスⅠ世の弔い合戦であり、悲劇の双生児を救出するための英雄的な出征でもある。士気は、旺盛だった。
　ダニルの用兵は的確であり、その采配は気迫に満ちていた。兵達はダニルに強い信頼を抱き、進んで死地に飛びこんだ。
　一方、ネルドール軍は敗走に敗走を重ねていた。彼らは、もともと荒地に巣食っていた山賊などの無法者の集まり、烏合の衆である。
　壊走する敵兵の背中に重い刃を振り下ろしながら、アルメキア兵達は勝利を確信しつつあった。

「気に食わん……」
　近頃、あの屈託無い笑顔を少しも見せることの無くなったダニルが、眉間にしわを寄せつつ、呟いた。その目は血走り、どこか飢えた獣を思わせる。
　が、戦場にあっては、そんなダニルの豹変も言わば当然のことであった。そのことに不審の念を抱く者はいない。
「奴らめ、脆すぎる」
　陣地の天幕の中、地図を覗きこみながらそう言うダニルに、副官のセプテムが近付いた。
「どうしました？」
「この地図を見ろ」
　自分より一回りは年上の彼に、ダニルが自然な威厳を見せつつ、言った。
「我々は、ほぼ一直線に、ネルドール王都ヴァルディアに向かっている。まるで導かれるがごとくだ」
「それは……敵軍に、国土を防衛しようという意識が薄いのです。もともと、つい数年前までは、ネルドールなどという国は無かったのですからね」
「それは、確かにそうだ」
　ダニルの声は、外の、星の無い夜空のように暗い。
「だが、絶対に何かある。相手は魔王国だ。連中は、まだ切り札を出していない」
「切り札？」
「魔道と、異種族どもだ」
「……」
　天幕の外で、谷を渡る風が、まるで幽鬼の声のように陰々と響いていた。

　ダニルの懸念をよそに、アルメキア軍は破竹の進撃を続けていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

敵の本拠地ヴァルディアは、すぐそこにまで迫っている。兵達は全身に闘気をみなぎらせ、険しい山道を力強く行軍している。
そして、その先頭で逞しい白馬にまたがるダニルは、内心の不審をけして表には出さなかった。総大将に毛ほどの迷いでもあれば、たちまち全軍に動揺が生まれてしまう。ダニルは兵達を動かす術をよく知っていた。
銀色に輝く兜の下で、ダニルの褐色の瞳が、きつくヴァルディアの尖塔群を睨んでいる。
わあああああ……っ
と、その時、軍のはるか後方から、驚愕に満ちたどよめきが聞こえた。
「何事かっ！」
素早く、ダニルが反応する。
「敵襲です！」
「規模は？」
「さ、さして多くはありませんが、あれは……」
副官が目を細め、後方の砂塵の奥に展開する、ネルドール軍の伏兵を見極めようとする。
それは、異形の兵達だった。
豚面のオークや、全身がカビに覆われたグール、食人鬼の異名を持つオーガー達。
空には、人面鳥であるハルピュイアやサイレンが舞っている。
「ひるむな！」
ダニルは叫び、腰の大剣を抜いて振りかざした。
「ひるむな、アルメキアの勇者よ！　敵は卑しい妖魔に過ぎん！　恐れるに足らんぞ！」
そう言いながら馬に拍車をかけ、戦場を目指す。
不意を打たれた兵達も冷静さを取り戻し、そして、ダニルに続いた。

その目覚めは、まるで深い淵から浮かび上がってくるような感覚であった。
「ぁ……」
何かを恐れるように、まつげを細かく震わせながら、ノエルはゆっくりと目を開く。
そこは、もとの地下牢だった。暗い、闇が凝ったような天井から、何本もの鎖がぶら下がっている。
ノエルは、はっと体を起こした。その緑色の目が、大きく見開かれる。
寝台に向かい合うように置かれた椅子に、全裸のレオンがぐったりと座り、そして、その傍らに、魔王ヴァルド・ネロがいる。
ネロは、例の厚手のマントを影のようにゆらめかせながら、ノエルに一歩近付いた。
「ひ……」
ノエルは、喉の奥で短く悲鳴をあげた。ネロの赤い目を見るうちに、忌まわしい記憶が

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

戻ったのだ。
　埃と、もっとおぞましいものに汚れていた肌は、いつのまにか清められ、つやつやとした光沢を取り戻してはいる。が、暗い快楽を伴った汚辱は、すでにノエルの心の奥深くにまで染みこんでいた。
「い、いやあああああああああああああああああああああああああああッ！」
　ノエルは、高い悲鳴をあげ、寝台の上で後ずさった。
「イヤ、イヤ、イヤ、イヤ、イヤあああああッ！」
　大きくかぶりを振り、豪奢な金髪を振り乱しながら、泣き喚く。
「どうした？　王女よ」
　あまり感情を感じさせない声で、ネロが訊いた。
「お主らしくもない」
「イヤ！　イヤです！　も、もう外は、外はイヤあ！」
　ヴァルディアの市民達にさんざんに辱められ、視線で犯され、汚穢な体液を浴びせられた感覚が、否応無しにノエルの体によみがえってくる。
　しかし、ノエルが最も恐れているのは、その屈辱のさなか、凄まじいほどのエクスタシーを感じてしまったことであった。
「……お主は、あの時、犯されることを望んでいたのだろう？」
　ネロが、ノエルのすぐ傍まで迫りながら、言った。
「ヤああーッ！」
　ノエルは、最も認めたくない事実を突き付けられ、耳を塞いでつっぷした。
「安心しろ、王女よ」
　その言葉とともに、無数の肉色の触手が、ノエルの細く白い体を包んだ。
「ひああッ！」
　ノエルが、おぞましさよりも純粋な恐怖に、叫び声を上げる。
「ああ……お、お願いです……もう、もうノエルをあんな目に、あわせないで下さい……」
　ネロよりも、自らの内に眠るおぞましい自分自身に、ノエルはあえなく屈服していた。
「……アルメキアのダニル将軍が、ここに迫っている」
「え？」
　ノエルの目に、恐怖に彩られた戸惑いの色が浮かぶ。
「出兵に反対するナンテスⅠ世を殺した上でな」
「え、な、なんですって……！」
　一呼吸おいて、ネロの声の意味が意識に届いたとき、ノエルは大声をあげていた。
「ダニルが、ナンテスを殺した」
「う、そ……」
「嘘ではない。あの国に、お前を待つものはいなくなったのだ」
「そんな……そんなの……うそ、です……」

Veon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そう言いながらも、ノエルは、ネロの言葉が真実であろうことを、直感によって気付いていた。
　だが、なぜか涙が出ない。突然で実感がわかないと言うこともあったし、すでに充分過ぎるほど泣いた。涙も、涸れてしまったのかもしれない。
「安心しろと言った。王女よ」
　ぬるぬると生温かい粘液を表面から分泌しながら、男根に酷似した触手達は、ノエルの体を戒めていく。
　それらはびくびくと脈打ちながら、すっかり敏感になったノエルの肌をまさぐり、乳首や秘部に、ぐりぐりとその先端を押しつけた。
「あ、ああァ……ンはぁ……」
　父の死を知ったばかりのノエルの唇から、他愛もなく熱い吐息が漏れる。
「お主を、他の者に渡したりなどせん。ダニルとかいう男にも、他の誰にもな」
　そう言いながら、ネロはノエルの体を寝台から下ろした。
「あ……」
　ぼんやりと濁ったノエルの緑色の瞳のすぐ前に、ネロの青黒い巨根がある。
　それは、ノエルの視線に反応したかのように、蛇のように鎌首をもたげ、ノエルの口元に近付いた。
「あム……」
　ノエルは、ほとんど抵抗することなく、ネロのペニスをその小さな口に咥えこんでしまっていた。
「ン……んちゅっ……んぐ……んんン〜ん」
　そして、その先端から溢れるねばつく液体を、半ば無意識のうちにすすりあげた。
　ノエルの白い肌はピンク色に染まり、鼻からはふンふンと媚びるような鼻声が漏れている。
　ノエルは、性の快楽の中に進んで堕ちようとするかのごとく、ネロの体液を積極的に吸い上げた。
　それにしたがって、体の奥の甘い疼きは強くなり、秘めやかな箇所はとろとろと愛液を溢れさせる。
　ネロのペニスは、まるでノエルの口腔を犯すように抽送を行い、そのたびに、ノエルの口から唾液と粘液の混じったものがだらしなくこぼれ落ちた。
「ン……んぶっ……ンう……んぐゥ……」
　いつしか、ノエルは、触手による愛撫をせがむように、我知らず腰をゆすっていた。
　全身をネロの粘液で濡らし、ぬらぬらとした淫靡な光沢に包まれながら、まぎれもない恍惚の表情を浮かべるノエル。しかし、その顔は、そのような状況の中でもあくまで美しかった。
　ネロの触手達が、ノエルの体を引き寄せる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「んはア……」
　ネロのペニスから解放されたそのピンク色の柔らかな唇が、熱い吐息を漏らす。
「我のものになるか？　ノエル」
　闇が凝ったような、ただ目だけがぎらぎらと赤く光るその顔を寄せ、ネロが訊いた。
「ああ……な、なります……」
　全身を触手でまさぐられ、すっかり濡れそぼった秘裂を、蛇のような青黒いペニスで嬲られながら、ノエルがうっとりとした声で答える。
　その、エメラルドに喩えられた緑色の瞳は虚ろで、ただ快楽の予感に淫らに潤んでいる。
「誓うか？」
「ち、ちかい、ます……ノエルは、ネロ様のものです……」
　他者に全てをゆだねきった者特有の頼りない声で、ノエルが隷従の誓いを宣言する。
「お主は、我のものだ」
　重々しくそう言いながら、ネロは、その男根を深々とノエルの体内に打ちこんだ。
「アアアアアアアアアアアアアアアアーっ！」
　触手に体を支えられて、どうにか二本の足で立っていたノエルの白い裸体が、しなやかにのけぞる。
　挿入されただけで軽い絶頂に達し、ぴくぴくと体を痙攣させるノエルの細い体に、ネロが容赦なく力強い動きを送りこむ。
「あッ！　あはッ！　はひン！　いあああああああン！」
　ノエルは、体を弓なりに反らしたまま、膣内をきつくこすられる感触に声をあげ続けていた。
「す、すごい……すごいです……あァ、ノエル、お、おかしくなります……！」
　触手によって緊縛されたその身をよじりながら、ノエルが訴える。
　素直に快楽を受け入れるようになったノエルの反応を楽しむように、ネロはノエルのありとあらゆる性感帯を触手で刺激した。その丸い先端をこすりつけ、細かい繊毛を這わせ、口の部分でちゅうちゅうと吸い上げる。
「あひッ！　そ、そこは、そこはあああッ！」
　ノエルが、一際高い声をあげた。触手の一本が、ノエルのつつましやかなアヌスを探り当てたのである。
「そ、そこは、いけません……あ、ダメ、入ってきますうっ！」
　表面から分泌する粘液と、ノエルが溢れさせている愛液に濡れた触手は、驚くほどスムーズに、ノエルの直腸へと侵入していく。
「お、おねがいです……そんなところ……わたし……わたし……ッ！」
　切なげに眉を寄せ、初めての肛姦にぞくぞくと背中を震わせながら、ノエルは体内をえぐる二本の触手を我知らずきゅんきゅんと締め上げた。
　まるで、その締め付けに応えるかのように、膣内を蹂躙する青黒いペニスと、肛門を犯

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

す肉色の触手が、薄い壁を挟んでノエルの靡肉を挟むように刺激する。
「あ……！　そ、そんな、されたら……わたし、もう……！」
　息もたえだえな様子で、それでも甘く喘ぎ続けるノエルの口に、別の触手がねじ込まれる。
「ン……んぷっ……ンむむむむ……っ」
　苦しげな息を漏らしながら、ノエルは口腔をこすりあげる触手の表面に舌を絡ませ、ちゅうちゅうと吸い上げた。
「ンンッ！」
　しかし、その口淫も、すぐにくぐもった悲鳴に中断される。
　触手の先から生え出た細い繊毛が、ノエルの小さな尿道口にまで侵入し、内部をざわざわと刺激し始めたのである。
「ん！　ん！　んんン！　んぐ！　んぶぶッ！　んんんんんんんんんんんンーッ！」
　ノエルの声はもはや声にならず、呻きとともに、ただ口の端からだらしなく涎が溢れるだけだ。
　ネロの触手は、ノエルの穴という穴を執拗に犯し、体液とともに苦痛を伴う強烈な快楽を絞り出している。
　中でも、ネロの青黒い剛直は一際激しく動き、その動きに翻弄されるノエルの体は、半ば宙に浮く形になっていた。
「ーッ！　ッ！　ッ！　ッ！」
　何度も押し寄せる絶頂の大波にさらされ、ノエルはもう何も分からなくなっていた。
（ああ……わたし、しぬの……？　それとも……もう、しんじゃったのかしら……？）
　快楽と、そして紛れもない幸福感に満ちた死を意識しながら、ノエルは壊れた人形のように気を失っていた。

　――そして、ノエルが再び意識を取り戻したときには、目の前に、レオンの姿があった。
　その紫色の瞳は、相変わらず弱々しい光しか宿していない。が、その股間のものは、痛々しいほどに勃起し、懸命に自己を主張していた。
「レオン……」
　ぼんやりとした、それでいながら淫らに濡れた声で、ノエルは弟の名を呼んだ。
　ノエルは、犬のように四つん這いになっていた。その体には、未だ、何本もの触手が絡みついている。しかし、股間に突き立っていた二本の触手は、すでにノエルの体内から抜かれていた。
「ふふ、レオンてば……そんなになって……」
　そう言いながら、ノエルは、石でできた椅子に座ったままのレオンに、ゆっくりと四つん這いでにじり寄っていった。
「ねえさま……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

はぁはぁと少女のように可愛い声で喘ぎながら、レオンが言う。
ノエルは、そんなレオンの様子にちろりと舌なめずりした後、背後に流し目を送った。
そこに、自らの支配者であるネロが佇んでいる。
「ネロさま……」
媚びるような甘たるい声で、ノエルはネロに語りかけた。
「私、レオンのが、ほしいんです……お許し、いただけますでしょうか？」
「淫乱な聖王女もいたものだ」
嗤いを含んだ声で、ネロが言う。
「好きにするがいい」
「ああ、嬉しい……」
うっとりとそう言いながら、ノエルは、座ったままのレオンの腰に、その白い腕を蛇のように絡めた。
「レオン……可愛いわ……」
「ああ、ねえさま……ぼく……」
「いいのよ。私が、全部してあげる」
にっこりと微笑みながら、ノエルはレオンの股間に、上気した顔をうずめた。
「ん……」
そして、長いまつげに縁取られた大きな目をうっとりと閉じ、固く反り返った成長途上のペニスを、口内に収める。
「ああっ……」
姉の口腔粘膜の感覚に、ぴくん、とレオンのほっそりとした体が震えた。
ノエルは、歯を立てないようにしながら、唇をしめつけ、ディープスロートを始める。
「あっ、ああアっ……ね、ねえさま……っ！」
レオンは、小さな白い拳をぎゅっと握り締めながら、高まっていく快感に声をおののかせた。
「あ、だめ、ねえさま……そんな……ン……あああッ！」
少女のような高い声を上げるレオンの敏感なペニスに、ノエルは大胆に舌を絡める。唾液を塗りつけるようにシャフト全体を舐め上げ、舌の裏側の柔らかい部分で、まだエラを張りきっていない様子の亀頭を刺激する。
「アアアっ！」
レオンは、あっけなく絶頂を迎え、細い腰を跳ね上げた。
口の中に軽い痛みを覚えるほどの勢いで、レオンのペニスの先端から、何度も熱い精液が放たれる。
ノエルは、いったんはその粘液を口内にため、そして、こくンこくンと喉を小さく鳴らしながら飲み干した。さらには、尿道に残る最後の一滴までもちゅるちゅると吸い上げ、レオンの体をぴくぴくと痙攣させる。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「……ふふっ、いっぱい出したね」
　ノエルは、その美しい顔に淫蕩な表情を浮かべながら、体を起こした。そして、まだはぁはぁを喘いでいるレオンの体を柔らかく抱きしめる。
「ネロ様のと同じ味がしたわ……」
　そう言いながら、ノエルが、レオンの唇にその唇を重ねた。
　姉弟とも、生まれて初めてのキスだった。
　ノエルの口が、レオンの舌を激しく吸い上げ、舌が口内をねぶりあげる。その間も、ノエルの白い手はレオンの華奢な体をまさぐっていた。
　そして、繊細な指が、レオンの股間のものをそっと包むように握る。
「あっ……！」
　ぴくん、とレオンの体が震え、白く細い首をのけぞらせる。
　それは、あれだけ放出したにもかかわらず、少しも勢いを衰えさせていなかった。
「レオン……」
　レオンの首筋を、ノエルの唇がなぞる。
　そしてノエルは、浅く腰掛けたレオンの腰を大胆にまたぎ、唾液と精液に濡れたままのペニスを、熱く濡れる自らの靡粘膜の狭間に導いた。
「あああ……ッ」
　双子の声が、ハーモニーを奏でる。
　まるである種の生物が捕食活動をするかのように、ノエルの秘部は、レオンのけなげに反り返った陰茎を飲みこんでいった。
　レオンは、まるで処女を捧げる乙女のような切なげな表情で、柔らかそうな頬を赤く染めている。
「あっ、あっ、あっ、ああっ、ああ〜ン……」
　レオンの全てを受け入れきったとき、ノエルは満足げな吐息を漏らした。
「ねえさま……ぼく、きもちいいよ……」
「わたしもよ、レオン……いっしょに、もっと気持ちよくなりましょう」
　そっくりな顔をすりすりと摺り寄せながら、互いの耳元に熱く囁く。
　そして双子は、悩ましげな顔で、腰を動かし始めた。
「は……ンああ……あッ……ンあああああああッ……」
　次第に腰の動きを早くするノエルとレオンに、てらてらと濡れ光る触手が何本も絡みついた。
　二人の白いつややかな肌に、赤黒い触手が這いまわり、粘液を塗りつける。
「ああ……す、すてき……すてき、ですゥ……っ！」
　弟を半ば犯すようにしながら全身を触手に嬲られる快感に、ノエルは一際濡れた声をあげた。
　今や、アルメキアの聖双生児と言われた王子と王女は、肉色の触手に半ば覆われながら、

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

互いの性器を貪るように腰を激しく動かしている。
「あああああああッ！」
　ノエルのアヌスに、再びネロの触手が侵入してきた。
　見ると、レオンも、切なげに眉を寄せながら、ふるふると大きく首を振っている。彼のアヌスも、魔王の触手の洗礼を受けているのだろう。
　前立腺を刺激されたのか、レオンのペニスが、一層その容積を増したかに、ノエルには感じられた。
「ンわあああああッ！」
　そのレオンのペニスと、ネロの触手に激しく貫かれ、ノエルはかつてない快美感に全身をぞくぞくと震わせていた。
「す、すごい……すごすぎ、ですッ……も、もうダメ、ダメ、ダメですう！」
　そんなノエルの切羽詰った声にせかされるように、レオンとネロの動きが一層激しさを増す。
　そして、その時が来た。
「あ、ああああああ、あア、ンあああッ！」
　ノエルの体内に、熱い粘液が次々と打ちこまれる。
　その感触に、ノエルは何度も何度も絶頂に舞い上げられていた。
　膣内と直腸に、大量の白濁液が注ぎ込まれ、どぷどぷと隙間から溢れ出る。
「あ、ンあああ！　イク！　またイきます！　あ、ああああ、ふわあああああアッ！」
　最早、ノエルは全てを忘れ、ただただ断続的に自らを襲う凄まじいエクスタシーにその身を委ねきっていた。

　外の喧騒を聞き、ネロはそっとノエルの体から離れた。
　ノエルの白い体が、ぐったりと地下牢の床に横たわる。
「来たか……」
　ネロは、その赤い目を細め、つぶやいた。
　王城の地下にまで届くその声は、ヴァルディアを包囲したアルメキア軍のときの声であった。

　アルメキア軍が、ヴァルディアを包囲して一週間が経った。
　血のように赤い夕陽が、今日も、ネルドールの山の中に沈む。
　ダニルは、ヴァルディア包囲陣の中で、密かに焦燥していた。
　糧食が、足りなかった。もともと不足気味だった食料はすでに底を尽きかけ、しかも補

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

給の目処は立っていない。
　ネルドール軍の目的は、アルメキア軍の兵站の徹底的な破壊にあったのだ。
　素早すぎる進軍によって伸びきっていたアルメキアの補給線は極端に脆くなっており、各所でネルドールの遊撃隊に寸断された。
　そもそもが、ネルドール側からの最初の襲撃からして、そうだった。異形の怪物達からなるネルドールの奇襲部隊は、アルメキア兵達に目もくれず、徹頭徹尾、アルメキア軍の糧食を奪い、焼き、そして谷底に投げ捨てたのである。
　驚くべきごとに、オークやオーガー、トロール鬼などは、戦場にありながら、アルメキアの糧食を貪り食った。また、ハルピュイア達は、その強酸性の排泄物を荷馬車に浴びせかけ、荷駄もろとも、食料を駄目にしてしまったのである。
「将軍……」
　副官のセプテムが、いらいらと天幕の中をうろつくダニルに、口を開いた。
「お気をお静め下さい。これからは持久戦です。幸い、本国にはまだ大量の備蓄がありますし、あと一ヶ月もすれば、我々の後から来る兵達も合流します」
「一ヶ月！」
　ダニルは、咆えるように叫び、セプテムに向き直った。
「お前には、その一ヶ月という時間が、どれだけ兵達の士気を損ねるのか分からんのか！」
「しかし……」
「未だ、我が軍の士気は高い。決戦のときは、今、そう、今しかないのだ！」
「ま、まさか？」
　目を見開くセプテムに、ダニルは、獣じみた強烈な笑みを浮かべる顔をぐいと寄せた。
「何がまさかだ？」
「そ、それは、冒険が過ぎます。これだけの兵で敵の王都を落とそうなど……せめて、ファーレン将軍の第二軍の合流を待って……」
「馬鹿がッ！」
　ダニルは、一声咆哮し、抜き打ちに腰の大剣を払った。
「！」
　声をあげかけた表情のまま、切断されたセプテムの頭が宙を飛ぶ。
「しょ、将軍、いかがなさいましたッ！」
　外で見張りをしていた騎士が、慌てて天幕に入ってきた。
「こ、これは……」
　そして、足元に転がるセプテムの首を見て、絶句する。
「セプテムは、我が軍の糧食を不当に横領していた」
　セプテムのマントで剣に付いた血をぬぐいながら、ぞっとするほど冷静な声で、ダニルは言った。
「よって、私が処刑した」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「……」
「それよりも、伝令だ。我が軍は明朝、ヴァルディアの城門を破り、全軍市内に突撃する！」

　そして、翌朝早く、ヴァルディアの攻防戦が始まった。
　確かにアルメキアの兵達の士気は未だ高く、訓練は行き届いていた。しかし、王都ヴァルディアに温存されていたネルドール軍主力を相手にするには、その兵力はけして充分過ぎるとは言えなかったであろう。
　また、昨日になって突然副官のセプテムが処刑されたことも、アルメキア軍に微妙な動揺をもたらしていた。
「それにしては、いい覚悟だ……」
　ネロは、王城の一番高いバルコニーに立ち、あちこちで火を上げている市中を見ながら、呟いた。
　その頭上で、空はどんよりと曇り、生温かい風が、かすかに煙の匂いを運んでいる。
「巧遅よりも拙速……ダニルめ、自軍の兵の効率のいい殺し方を心得ているな」
　そのネロの声は、どこか楽しげだ。
「我が望み通りの消耗戦だ。これで、奴がきちんとここまでたどり着いてくれれば……」
　ネロの赤い目から放たれる視線の先で、アルメキアの騎士達とネルドールの怪物達が、もみ合うようにして血闘を演じ続けている。
　ネロは、さも可笑しそうにくつくつと笑い、そして城の中へと姿を消した。

　ダニルは、溝の中にいた。
　冷たい汚水と、流れ続けている血が、着実にダニルの体力を奪っていく。
　こんなはずではなかった。
　つい先ほどまで、ダニルは全軍の先頭で馬を駆り、勇敢に突撃を繰り返していたのだ。
　それが、市中の地理に精通したネルドール兵の横撃を受け、態勢を立て直す間もなく、乱戦になったのである。
　鉄と鉄がぶつかり合う鋭い音と、断末魔の絶叫が渦巻く中、血煙で半ば視界を塞がれながらも、ダニルは狂ったように剣を振るい続けた。
　しかし、まず最初に乗馬が槍の一撃によって倒され、地面に転がったダニルの脇腹を、誰とは知らぬ者の曲刀が深くえぐったのである。
　ダニルは、大量の出血に朦朧としながら必死で身をかわすうちに、街路脇の溝に落ちこんでいた。ダニルの逞しい体が辛うじて入るような、それだけの幅の側溝である。
　そして、主戦場は別の場所に移り、ダニルはそこに取り残されたのだ。
（こんな、馬鹿な……）
　たとえ、もし仮に死ぬとしても、自分にはもっと英雄的な死に場所が用意されているのではなかったか。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　涙は、出ない。瀕死の獣のような呼吸が、細く口から漏れ出るだけだ。
「……失望したぞ、ダニル」
　と、その時、聞き覚えのある声が、ダニルの耳に届いた。
　ダニルは、大声を上げ、身を起こそうとした。しかし、消耗しきった体ではそれは果たせず、ただ空しく体をよじったに過ぎなかったのだが。
「ハリウス……」
　その声も、かすかなうめき声にしかならない。
「殺しちゃえ、こんなヤツ」
「そうもいかないさ、アリエル」
「だって、コイツがご主人様の腕を……！」
　ハリウスの声に、興奮したような少女の声が重なっている。
「この男には、まだ演じてもらわなくてはならない役割があるのだ」
　ダニルの視界の端に、ハリウスの痩せた体が現れた。
　そして、右腕一本で複雑な印を組み、何か呪文を唱える。
「ぬッ！」
　ダニルは、驚愕していた。
　体の奥底から、強烈な活力が涌き出てくるのが自覚できたのだ。
　これまでに感じたことのないような高揚感が、体を熱くたぎらせる。
　ダニルは、凄まじい勢いで立ち上がった。
「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」
　ダニルは、まるで魔獣の如き咆哮をあげていた。

　戦場は、バルディアの王城の前の広場に移っていた。
　すでに、そこには累々と死者が横たわっている。両軍とも、疲弊しきっていた。
　それでも、アルメキアの兵も、ネルドールの兵も、何かに魅入られたかのように、互いに向かって血と脂に汚れた武器を振るいあっている。
　だが、乱闘の中で指導者を見失いながらも士気に勝るアルメキアは、ごくわずかにネルドールを押しているかに見えた。
　と、その時であった。
「うわあああああああああああああああああああああーッ！」
　アルメキア軍の中央で、大音声とともに、炎が炸裂した。何人もの兵士が、炎に包まれながら、一度に宙に舞い上げられる。
「ネロ様！」
「ネロ様だ！　ヴァルド・ネロ陛下だ！」
　ネロの出現に、ネルドールの兵達は大きく気勢を上げた。
「あ、あれが……魔王？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ひるむな！　奴とて、本物の魔神などではない。魔道に長けただけの、ただの人間のはずだ！」
　アルメキアの騎士の一人が、声を励まして叫ぶ。しかし、それも、自分自身で、どこまで信じていることなのか。
　ネロの赤い目が、強く光を放つ。
　すると、無数の炎の矢が空中に出現し、次々とアルメキア軍に殺到した。
「ぐわーッ！」
「だ、誰か、誰か火を消してくれっ！」
「く、くそっ、これまでか……ッ！」
　ネロの圧倒的な魔力の前に、アルメキアの兵達が火に包まれて、次々と倒れていく。
　ただ、ネルドールの兵達も、崩壊しつつあるアルメキア軍に突撃するどころか、ネロの魔道に巻き込まれないようにするので精一杯だ。
　それでも、アルメキアの敗北は時間の問題であるかに見えた。
　その時――
「ぬあああッ！」
　鬼神の如き絶叫を上げながら、戦場を突っ切る姿があった。
「あ、あれは……！」
「将軍！」
「ダニルさまだあっ！」
　確かに、それはダニルだった。ダニルが、血と埃で汚れた姿で、凄まじい咆哮をあげながら、剣を振りかざして駆けているのである。
　数本の炎の矢が、ネロに一直線に迫るダニルの体を貫く。
　アルメキア兵達は、みな一様に悲鳴をあげた。その悲鳴が、大きなどよめきに変わる。
　魔道の炎が髪やマントに引火し、激しい火焔に包まれながらも、ダニルは突進を止めなかったのである。
「だあッ！」
「ぬおっ？」
　ネロと、ダニルの体が、ぶつかった。
　ネロの背中から、その巨体を貫いた大剣の先が現れる。
　そして、ダニルの体を包む炎が、ネロのマントにも燃え移った。
　二人は、立ったまま、ぴくりとも動かない。その二人の体を包む炎が、ますます激しくなっていく。
「お、おおお……」
「何ということだ……」
　両軍の兵士とも、目の前に展開されたことに、ただ声をあげるのみだ。
　皆、あまりに壮絶で伝説的な光景を目の当たりにし、等しく戦意を失っている。血に濡

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

れたその手から、がらン、ごろンと、次々と武器が滑り落ちた。
　ヴァルディアの王城の前で、つい先ほどまで死闘を演じていた両軍の兵達が、燃え盛る炎を囲むようにして、茫然と立ち尽くしている。

　そんな様子を、アリエルとともに空中に浮かぶハリウスは、どこか悲しげな目で見下ろしていた

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

エピローグ

　外のどよめきが、かすかに、地下牢にまで届いている。
　ノエルは、綺麗に整えられた寝台で、ぼんやりと目を覚ました。
　寝台に向かい合う形で置かれた大きな椅子に、レオンが座っている。
　レオンは、その華奢な体には大きすぎる、厚手のマントを羽織っていた。
「……なにか、あったの？」
　ノエルが、幼女のように小首をかしげながら、訊く。
「アルメキアの兵達が、僕達を迎えに来たんですよ」
　そう応えるレオンの声は、あいかわらず少女のようであったが、落ちついていて、どこか威厳すら感じさせた。
「じゃ、じゃあ……ネロさまは？」
　ノエルが、少し慌てたような声をあげる。アルメキアの兵達がここに来たとあっては、ネルドールの王がただで済むわけはない。
「まさか、あたしを、捨てて……それとも……それとも……」
　自らの支配者に関する最悪の想像に、ノエルが声を震わせる。
「……大丈夫」
　レオンは、目を閉じてふっと笑い、立ちあがった。
「大丈夫ですよ、ねえさま」
「え……？」
「彼は――魔王ヴァルド・ネロは、ここにいます」
　言いながら、そっとマントの前を開く。
　影になったマントの奥、レオンの股間の部分から、ぬらつく青黒い蛇のような触手が、のろりと鎌首をもたげた。
「あ……」
　ノエルが緑色の目を見開き、両手を口に当てる。
「ようやく、ねえさまを取り戻せたんですね、僕……」
　レオンは、ゆっくりと目を開けた。
　美しい紫色であったはずのその瞳が、禍々しい赤い光を放っている。
「あ、あなたは……あなた、が……？」
「ネロは、ネルドールを一つにまとめるために、魔道によって作り出した僕の分身です」
　レオンは、落ちついた口調で話し出した。
「父上の件は、残念でした。許しを乞うこともできないと思ってます。それに、ハリウスにも苦労をかけました……。でも、後悔はしていませんよ。ねえさまを奪い返すことができましたからね」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　レオンが寝台の上に上がり、座りこんだままの姉の目の前に立つ。
「それともねえさまは、まだダニルのことを想っているんですか？」
　ノエルは、ふるふるとかぶりを振った。
　そして、両手をシーツの上に付き、その顔をレオンの足に寄せる。
「わたしは……あなたのものです……陛下……」
　ノエルは、そう言って、レオンの足にそっと口付けた。

　指導者を失ったアルメキアとネルドールの間に休戦協定が結ばれ、レオンとノエルはアルメキアに帰国した。
　三ヶ月後、アルメキアは、新たに即位したレオンの指揮のもと、再びネルドールに出兵した。そして、ほとんど戦いらしい戦いをせずに、その全土を併合したのである。
　アルメキア・ネルドール両王国は、“聖魔王”レオンⅠ世による、長い治世のもとに置かれることになった。

「あア、あア、あア、あア、あア……」
　ノエルは、月光の差し込む宮殿の一室で、レオンの腰にまたがり、嬌声をあげていた。
「き、きもちイイ……きもちイイです、陛下……」
　そう言うノエルの腹部が、丸く膨らんでいる。まだどこか幼さを残すその顔には、ひどくアンバランスな大きさだ。
「あんまり激しくすると、お腹の子に障りますよ」
　笑みを含んだ声で、レオンはノエルを下から貫きながら、言った。その白い手は、最近たっぷりとしてきたノエルの乳房に伸ばされている。
「で、でも、でもォ……ノエル、よすぎてガマンできないんですゥ……」
「ふふっ、しかたないなあ、ねえさまってば」
　そう言うレオンの股間から、ひゅるひゅると肉色の触手が現れ出る。
「ああ……陛下……早く、早くおねがいします……」
　姉のはしたないおねだりに応えるように、触手たちが、どこか優しくノエルの体をまさぐり出す。
「ああ、すてき……すてきです……」
　ノエルが、恍惚の表情を浮かべながら、身重の体をのけぞらせる。
　触手のうちの一本が、たっぷりと粘液を分泌しながら、ノエルのアヌスにその身を潜らせた。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ンはうっ！」
　びくン、とノエルの体が跳ねる。
「あ、お尻……イイ……きもち、イイですぅ……」
「あはっ……ねえさまのココ、すごく締めつけてきましたよ」
「だ、だってえ……ンあっ、あーッ！」
　ノエルは、一際高い声をあげた。レオンが、残酷にノエルの乳首をひねりあげたのだ。
　白い母乳が、細い軌跡を描いてほとばしる。
「ス、スゴい……スゴい、ですう……ッ！　なかで、なかでぐりぐりしてるゥ……！」
「ああ、ねえさま……ねえさまのココ、すごく熱くて、気持いい……」
　下から姉の体を激しく責めたてながらも、レオンが少女のような声をあげる。
「う、うれしい、もっと、感じてください……陛下……ンあああああああッ！」
「ねえさま、僕、僕……ッ！」
「わ、わたしも……あッ！　あああぁアっ！　あああああああーッ！」
　レオンの華奢な体に似合わない青黒い巨根と、そして無数の触手が律動し、いっせいに白濁液を放つ。
「イク、イク、イクう、イっちゃうううううううううううウーッ！」
　体の中と外に熱い精液を浴びせられ、ノエルは高い絶叫をあげた。

「ねえさま……」
　添い寝するノエルのお腹を優しく撫でながら、レオンは囁いた。
「さっき、感じましたよ……」
「え？」
「この中にいるの、僕らと同じ、双子です」
「ホント、ですか……？」
　嬉しげにそう言うノエルに、レオンはにっこりと微笑みかける。
　月が、そんな二人を、いつまでも照らし続けていた。

終

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw